

デイヴィッド・チューダー書簡抄

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-02-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 澁谷, 政子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/4987

デイヴィッド・チューダー書簡抄

ー1940年代から1960年代初期までー

澁谷 政子^(*)

(2011年9月30日 受付)

アメリカの音楽家デイヴィッド・チューダー David Tudor (1926～1996) は、第2次大戦後の実験音楽および前衛音楽の作曲家たちから信頼を得て活躍したピアニストであり、また、1960年代後半以降は電子音響制作を手がけ、さまざまな芸術家や科学技術者との共同制作を交えながら作曲家として活動した。演奏家としても、作曲家としても、20世紀音楽の重要な局面を支えた注目すべき音楽家であるが、自らの手によるまとまった文章をほとんど書き残していないこともあり、その活動の内実は把握しにくい。

本稿は、この寡黙でどこか神秘的なイメージがつきまとう音楽家チューダーについて、その人物像に接近するために、彼が書き残した書簡および書簡草稿からアプローチを試みるものである。手紙という多少私的なメディアに載せられた彼自身の言葉を追うことを通して、彼の音楽家としての態度や関心事を浮かび上がらせることがねらいである。そこで本稿では、筆者が平成21年よりおこなっている一次資料調査および二次資料から得られた書簡等から、チューダーという人物を理解する手がかりとして役立つと思われる文章を含むものを選び、おおよそ年代順に配列し、訳出した。これまでの調査で確認したチューダーの書簡および書簡草稿の所蔵・所収情報を以下に示す。

表1 書簡等の出典および件数

出典	1940年代	1950年代	1960年代	1970年代～	年代不明	合計
【DTP】	11	9	4	3	1	28
【MCRP】	－	55	23	4	2	84
【JCC】	－	1	6	－	－	7
【SWC】	2	－	－	－	－	2
【HPC】	－	4	－	－	－	4
【KSD】	－	12	1	－	－	13
合計	13	81	34	7	3	138

※ 【DTP】 【MCRP】 の件数は簡単なメモ的なものを省いた数字であり、実際の所蔵資料の件数とは若干異なる。

【DTP】以外の資料は、実際に郵送された「書簡」（葉書を含む）であるが、【DTP】所蔵の資料はチューダーの手元に残された書簡の下書き、すなわち「書簡草稿」である。後者については最終稿ではない可能性もあり、また、実際に投函されたかどうか不明であるが、本稿の目的に照らして、十分に資料として意味をもつと判断した。また、全138点の書簡等の内容は、コンサートの計画や契約に関する事務的な事項や、滞在先でのごく一般的な近況報告や連絡先の通知が多くを占める。もちろん、それらの文章も、何らかの点でチューダーという人物についての指標となりうるが、今回は、とくに音楽に関する志向、音楽活動についての考え、他の作曲家等に対する評価、個人的な内面の問題等が、比較的明示的に述べられているものを選び、42点を訳出した。また、各書簡等はできるだけコンテキストがわかるよう全文を訳出するよう心がけたが、ごく事務的な箇所や冗長な箇所については一部省略した。

また表1に示したように、収集した書簡等の数は1950年代が圧倒的に多い。これについては、今回調査した書簡等の宛先が大きく影響している。チューダーのパートナーであった、詩人・陶芸家・著述家メアリー・キャロライン・リチャーズ Mary Caroline Richards (1916～1999)、ダルムシュタット国際現代音楽夏期講習会の創始者ヴォルフガング・シュタイネッケ Wolfgang Steinecke (1910～1961)、同講習会を精力的に牽引し、ヨーロッパ前衛音楽の核の一人となった作曲家カールハインツ・シュトックハウゼン Karlheinz Stockhausen (1928～2007) の3名が主要な宛先だが、チューダーがダルムシュタットと深く関わったのは1956年～1961年であり、また、リチャーズとの関係も1960年代に次第に変化していくため、資料が1950年代に集中するという結果となった。

また、書簡という資料の性質上、文章が断片的であったり、コンテキストが不明瞭な場合もあり、年代のかたよりの問題とあわせると、本稿に提示する資料のみからチューダーの人物像を描ききすることは難しいと言わざるをえない。しかし、彼の生の言葉、生の声を拾い上げていき、それぞれ異なる脈絡のなかの「点」を見渡してみると、いくつかの線も浮かび上がってくる。本稿ではまずそれらを確認することを目的として、それらの点や線を全体像へと組み上げていく作業は稿を改めて行いたい。

凡例

- 〈 〉 本稿における書簡等の整理番号
- [] 資料所蔵図書館や編者によって推定または確定されている年代や日付、編者による補記
- [] 筆者が内容から推定した年代や日付、筆者による補記
- 【 】 書簡等の出典（各コレクション等の所蔵情報は文献表に記載）

【DTP】=David Tudor Papers. ボックス番号－フォルダ番号を付記

【MCRP】=Mary Caroline Richards Papers. ボックス番号－フォルダ番号を付記

【JCC】=John Cage Collection. シリーズ番号－ボックス番号－フォルダ番号を付記

【HPC】=Henri Pousseur Collection. 分類を付記

【SWC】=Stefan Wolpe Collection. マイクロフィルム番号-ページ数を付記

【KSD】=Misch & Bandur (eds.) 2001. ページ数を付記

1) 1940年代——オルガニストからピアニストへ

チューダーの活動の概要

1943年に地元フィラデルフィア州スウォースモアのトリニティ教会のオルガニストの職を得たチューダーは、同年、イルマ・ヴォルペ Irma Wolpe (1902~1984) のピアノ演奏を聴き、ピアニストへの転身を決意する。イルマに師事すると同時に、彼女の夫で作曲家のステファン・ヴォルペ Stefan Wolpe (1902~1972) から作曲の手ほどきを受ける。1947年にニューヨークに居を移し、ピアニストとしての活動を開始する。1948年からヴォルペが主催するニューヨークの現代音楽学校 Contemporary Music School で教えるほか (1952年まで)、ジーン・エルドマン Jean Erdman (1916~) らのモダン・ダンスの伴奏ピアニストとしても活動。1949年末、エルドマンを介してジョン・ケージ John Cage (1912~1992) と出会う。¹⁾

書 簡

〈1〉〔1940年代〕 鉛筆書き草稿 Tudor から George へ 【DTP61-4】

ジョージへ

×それから、もちろん9月1日には喜んで演奏するし、7月と8月に演奏すると約束したことの埋め合わせに、9月の他の日曜も大丈夫だと思う。そのほうがきみにとってよければだが。

×小切手拝受、ありがとう！

僕の居場所は素敵な落ち着いたところで、仕事はちょうどのってきたところだ。

〔続く8行削除。内容は以下とほぼ同様。〕

ジョージ、心からの友情から言うのだけれど、きみのほうで引き続きオルガニストをさがしてはくれないだろうか。きみと仕事することが僕にとっていつも魅力的だったことは、もちろんわかってきていると思うけれど、今まさに、僕の人生が、これまで長いこと待ち望んでいた変化のステージにあることをぜひ理解してほしい。これまでかなりの苦難のあった人生の「思い出」にいやおうなく浸らされるような提案を受けて、自分ががまんできるかどうかは自信がない。これまでの年月全体を通じて、僕のオルガンがだんだん墮落する状態にあったことは疑いないし、だけど、オルガンから離れると、僕には新しいアイディアがたくさんわいてくる (オルガンは今や僕にとっては落とし穴だ!)。もうオルガンでは、自分のベストな仕事をするのができないと思う。僕の心はオルガンにはないんだ! きみをがっかりさせるようなことを言ってこの手紙

を終えるのはつらいけれど、僕が今たしかに言えるのは、きみのために僕ができることならば、何でもしたいと思っているということだ。

〈2〉〔1940年代〕 手書き書簡 Tudor から Stefan Wolpe へ 【SWC MF268.1-1759】

ステファン、あなたがいないのがどんなに寂しいか！ あなたにカンタータを送りました——着いているといいのですが。お金がないので、これは複写していませんが、間奏曲はコピーしました。まず第4番、それから第3番を演奏するつもりです。2曲ともすごくいいです。第3番はとても美しい——僕の友人たちはみなコピーを欲しがります。最後のコーラスをオルガン用に編曲することは可能でしょうか？ それなら僕は第5間奏曲から終わりまで弾けるでしょう。第4番は少し静的に響きます、理由は二つ。まずは、各声部間の強拍の連続がそれほど響かないため。第2には強弱のため——*f* と *ff* を区別するのはまあまあ簡単ですが、この曲で要求されるタッチのため、同時進行の強度の変化をつけることは、ほとんどこの楽器では不可能になっています、でもあなたの音楽はそれを要求しているわけですが。

今、たくさんの曲の勉強をしていて、《パッサカリア》²⁾ は毎日さらっています。

心をこめてキスを送ります

デイヴィッド

〈3〉〔1946年以降?〕 ペン書き草稿 Tudor から Stefan Wolpe へ 【DTP60-7】

最愛のステファン、手紙をありがとうございます！ それから書かれなかった手紙も。あなたへの敬愛の念はすみずみまでしみわたり、あなたのことをいつたりとも忘れることはありません。

以前、僕はあなたの曲をミトロプーロスのために弾きたいと思い、彼に手紙を書きました。彼がここに滞在していたあいだは、ピアノもなく時間もなかったのですが、彼は僕に親切な手紙を書いてくれて、あなたの作品に熱烈な賛辞を述べていました。こうも書いてありました。「残念ながら、芸術家が人に認められるチャンスを得て成功をおさめるために要求されるものはひじょうに大きいから、たいていは、有名人になるというプレッシャーの下で窒息してしまうものだよ。」これは元気づけになるでしょうか？

彼は12月にここに1週間滞在するので、その時にまた会う約束をしました。この前は、ブルックナーの4番とレーガーのモーツァルト変奏曲を振っていました。

僕は作曲のことをすごく考えていて、たぶんこの秋には、できただけのものをあなたに見せることができると思います。あなたの《パッサカリア》は、最近、僕の手ですくすくと育っています、きっと僕の演奏はみちがえているでしょう。

デイヴィッド

〈4〉〔1940年代〕 ペン書き草稿 Tudor から Shirley へ 【DTP61-4】

シャーリー、僕のシャーリーは元気？

きみがボクシングを始めたときジャッキーが言っていた。いいね！ だけど、ピアノの横っ面をはらないように、僕たちはもう十分、ピアノ殴打をしてるから。

イシュトミンについて僕が言ったことについて思い返していたのだけれど、彼を一度しか聴いてないことを考えたら、あれはすこしきつかった。でも、ああいうアカデミーへの嫌悪をはっきり言ってしまおう。あの人たちの音楽は、音符やフレーズや強弱などを正確に演奏するだけだ。「あらゆる音のあいだの論理的連関」——こういう手の演奏家（ブラームスとか、ヨアヒム、リヒター、シュヴァイツァー等々につらなる）。ユージーンはこれを少し思い出させるね——で、ちょっとだけでも僕を爆発させるにはもう十分だ。僕にとって、音楽は精神的リアリティとして存在する。音楽は存在しつづける、あらゆる作曲家と、音符と強弱を書きつけたあらゆるページが消滅したあとにも。そして、すべての演奏家は、このリアリティという明白な事実を、聴き手の耳に聞こえるように苦闘しなければならない。

それ以外に、哀れなピアニストの存在の理由などあるだろうか？ ときに作曲家たちは、自身のヴィジョンを不完全にしか聴いていない。ならば、解釈者は、明確に認識されていないと見て取ったものを、自身の演奏に吹き込まねばならない。音楽は、直接的な精神的体験であるべきだ！！

僕の雑誌記事をどう思った？ 言葉が足りず、不可解でわかりにくいのは確かだ。だけど、いったい誰が、わからない何かを理解できるというのだろう？

僕がきみに示したリストのエチュードのテンポはまったくの間違い。ただ、できる限り速く弾くこと。

こっちでのミトロプーロスはものすごくいい演奏だった。きみのお気に入りのなかの2曲、メンデルスゾーンとレーガー。（これはきみに、この暇人の金持ち連中を追い回させることになるかな。）とにかく、太陽、樹、風、潮がうらやましい、きみが自然から力をもらえるよう祈っている。

きみへの愛をこめて

デイヴィッド

〈5〉〔1947年？〕 鉛筆書き草稿 Tudor から Mr. R へ 【DTP61-4】

〔……前略……〕 スウォースモアにきた最初の年に私はイルマ・ヴォルペと出会い、彼女は私の人生の道筋を完全に変えました。彼女の演奏を聴いたそのとたん、本能的に、ピアニストになるのだと決心しました。ピアノにそのような感受性と直接的表現が可能なのだという発見は、今も忘れられない衝撃をもたらしました。その後、私の決意は具体化していきました。——たとえば、もし同時代の音楽に何かかわりたいと思うなら、次の事実を認識するはずです。つまり、オル

ガンという楽器は非直接的なので生気に欠け、また、その時代がかった壮大な性質は我々の新しい音楽がもつきわめて複雑な強弱およびリズムの変調にはふさわしくありません。それに、オルガン演奏にはほんとうに少ない聴衆層しかありません——あらゆる面で限られています。聴く価値のある音楽であるなら、世界中の多数の人々に届くべきでしょう。（あるいは、作曲家は自分のためまたは自分が選んだ聴衆のために作曲するかもしれませんが、音楽はあらゆる人々に向けられているのです。）〔……後略……〕

（解説）

以上に訳出したものは数としては多くはないものの、青年チューダーの、新たな領域への挑戦の気概や、ヴォルペへの傾倒ぶりが率直に述べられている点で興味深い。

〈1〉の宛先の George がどのような人物かは特定できないが、文面からフィラデルフィアのオルガニスト時代の仕事仲間と推測してよさそうである。オルガンからピアノへの転身がきわめて強い口調で語られており、オルガニストとしての活動にどこか行き詰まりを感じていた様子が伺える。

この転身については〈5〉でも語られている。これはおそらくニューヨークに移り住んで間もない時期の草稿と思われる。ここでは、オルガンが素早い強弱のコントラストや入り組んだ細かいリズムを表現することに適していないことを指摘しており、ここから、彼がピアノという楽器に対して、レスポンスの早さ、急速なパッセージ、奏法のダイナミックな切替えなどに魅力を感じていたと推測することができる。³⁾

〈2〉〈3〉はともにステファン・ヴォルペ宛で、彼への強い尊敬の念が読み取れる。〈2〉で述べられている間奏曲はどのヴォルペ作品であるか特定できないが、楽曲について一種の批評的な発言をしている点が興味深い。ここに、作曲家の譜面が要求するテクニカルな側面について客観的に把握し言語化する能力を垣間みることもできるが、このような力は、おそらく、1943年～1947年にヴォルペがピアノ組曲《バトル・ピース》の作曲に取り組んだ際、チューダーが草稿を演奏し作曲家の作業をサポートしていくなかで、さらに磨かれたのではなかろうか。⁴⁾ また、ヴォルペは1946年に指揮者ディミトリ・ミトロプーロス Dimitris Mitropoulos (1896～1960) への紹介状をチューダーに送っているが⁵⁾、〈3〉の文面からは、ただ師匠に頼るだけでなく、自ら積極的に有名指揮者にアプローチしていることが伺える。

〈4〉の宛先の Shirley はこの時期のガールフレンドであろうか。作曲家に単に従うのではなく、作曲家に足りないものを補う演奏家の自負が表明されている。また、音楽の精神性についてのチューダーの論議が初々しい。

2) 1950年代——前衛音楽演奏の第一人者として

チューダーの活動の概要

1950年12月のブーレーズのピアノ・ソナタ第2番のアメリカ初演⁶⁾をきっかけに、チューダーは同時代の音楽のすぐれた演奏解釈で知られるようになり、ケージらいわゆる「ニューヨーク楽派」の作品演奏を中心に活躍する。1954年には初のヨーロッパ・ツアーをおこない、シュトックハウゼンら、ヨーロッパの前衛作曲家たちとの接触を得る。1956年に初めてダルムシュタット国際現代音楽夏期講習会に参加し、ヨーロッパにニューヨーク楽派の音楽を紹介するとともに、ヨーロッパの前衛音楽作品もレパートリーに加え、数多くの難曲、図形楽譜による楽曲などの初演をこなしてゆく。ダルムシュタットにはその後、1958年、1959年、そして1961年に参加する。プライベート面で重要なのは、1951年夏、ノースカロライナ州のブラック・マウンテン・カレッジ⁷⁾の夏期セッションに参加し、当時カレッジの教員であったリチャーズと出会ったことである。二人の仲はおそらく急速に深まりをみせ、パートナーとして暮らすようになる。⁸⁾ また、1950年代を通じてシュタイナー思想へ接近し、人智学協会へ入会⁹⁾、1959年にはヨーロッパ滞在中に、協会のメッカとも言えるドルナッハの「ゲーテアヌム」を訪れている。

書 簡

〈6〉〔1950年代初期?〕 ペン書き草稿 Tudor（ミネソタ）から〔?〕へ 【DTP58-10】¹⁰⁾

愛しいきみへ

きみに会いたくてたまらなくなつて、ときどきここから帰りたくなる。知つてのとおり、手紙を書くということになると僕は怠け者だけれど、今までは書きたいという気持ちにならなかつただけ。こんなことを言いたくはないけれど、実は今すこし退屈している。ここではやるべきことがそんなに多くないし、聴衆は素人で、満足というわけにはいかない。それに風景はただ平坦で、ただ雪が白く広がっているだけ。いちばん美しかった眺めはミシガン湖（横断時）で、ものすごく深く曖昧模糊とした霧のなかを渡った。だから、夢や記憶のなかのきみに代わるようなものは何にもない、と言えるかな。いいことが一つ。来年、ツアーが2つ実現しそうだ。もし、あともう一つできたら、たぶん教える仕事をやめられる（だけど、このことは僕の友人たちには言わないで）！ このツアー病はきみからもらったものだと思わないか？ 待ってろ、きつときみをオーストラリアに飛ばしてやるから。

とはいえ、ときどきは楽しい時を過ごしている。ここの人たちはとても親切だから、もしきみが付き合うことになったら、きっとすごく楽しめると思う。きみのことから、ありとあらゆる機会に僕が馬のように食べていると想像しているだろう。ただ一つ残念なのはいいステーキがないこと。ここでは全部（いいものは全部）ニューヨークに送ってしまうんだ。だから、きみが美味しい肉にかぶりつくときには、僕のことを思い出してくれ。公演は2月9日ごろまでで、12日

に帰る予定だ。もう少し長かったらと思うところもある。演奏することはいつも楽しいし、得るものがあるからね。

すてきなキスの一つ送るよ、僕の枕はもう満杯だから。

デイヴィッド

〈7〉1951年11月13日 手書き書簡 Tudor（ニューヨーク）から Mary Caroline Richards（ニューヨーク）へ 【MCRP26-1】

僕の心の望み、いとしいきみへ

ずっと前にこの手紙を書き始めたのだけれど、今まで書き終える時間がなかった。地獄の炎のようにきみを想っている、そこにきみが本当にいるかどうか確かめたくて、なんども振り返ってしまうよ。今度はS¹¹¹ と付き合うのをやめる——彼は以前は穏やかだったけれど、今は何かが彼を荒らしていて、どんどん気難しくなっていくばかりだ。彼が子どもたちや神智学仲間といるのを見ながら過ごしてきて、いったいなぜなのか、ぼんやりとつかめてきた。彼らは自分たちが賢明だと信じたがっている——どうしようもない！ とんでもないよ！ でも今はこのことは話さないでおこう。今日までずっと不愉快だった——同じ不満。きみなしではあらゆることが進まない。きみがここにいて、ぜんぶを落ち着かせてくれたらなあ。きみの手紙に果てしない感謝。僕も寸暇を惜しんで君に書くよ。音楽学校のイザーク〔・ネミロフ〕に電話して、ドアのところに何か来ていないか尋ねてくれないか。メールボックスの鍵をミープさんが持っているかもしれない。お金は足りている？ あれこれ考えずにすぐ電報を打って。為替で送るから。アルトの本は小さい封筒にはいって、たしか、前の部屋のどこかにあると思う。なにか暖かい服があるか、僕のクローゼットを覗いてみて。暖かくするんだよ。今、ありとあらゆる花を注文している。どれかがきみに届きますように。

あ・い・し・て・る

デイヴィッド

〈8〉〔1952年？〕 手書き書簡 Tudor から Mary Caroline Richards へ 【MCRP26-2】

いとしいきみへ

春が来たけれど、きみがいないのでとても暗い。こんなふうなのはつらい。とりわけ理由はないけれど。今は仕事が増えてきて、日曜にフィラデルフィアに行く約束をした。来週は2～3のコンサートのリハーサルがある。あした、ジョン〔・ケージ〕と僕はジュリアードでスキヤンダルを起こすだろう——コイン投げレクチャーだ！ ジョンはこのトークの仕事に乗り気ではなかったのだけれど、モーティ〔モートン・フェルドマン〕と僕が説得した。ものごとは、理屈で分からせようとするよりも、実際に提示したほうがいいと。それで、彼はこの仕事全部をコインで決めることにして、今はすべてが順調だ。かわいそうな人たち、何かを得ようとするにちがいな

いのだが、ハハハ、これはほんとにダダになるよ！ その他のニュースは、ぼくが独りさびしくて、きみが帰ってくるのを待てない、ということ。今、ロッキー〔猫〕は屋根への階段を上ったり降りたりしている。あわてて上るものだから、動きがめちゃくちゃで、ちょっと跳んでは落ちるんだ。モーティとハメット〔？〕が別れた——驚いた、もううまくいくに決まっていると思っていたから。モーティが言うには、うまくいきすぎていた——そういうものかもしれない。腸の調子は改善の兆候を示している。たぶん、いっさいの薬を飲むのをやめたからだ。ある人がラジオで言っていたのだが、たいていの人は、すべての関節にボールベアリングがあるから、薬をうまく飲み込めるそうだ。これには感心した。

愛している

デイヴィッド

〈9〉[1954年10月25日(消印)] 手書き書簡 Tudor (パリ) から Mary Caroline Richards (ストーニー・ポイント) へ 【MCRP26-2】

僕のベイビー・ドールへ

ドナウエッシンゲンではあらゆるところでスキャンダルが起こって大騒動のさなかだ。口笛と拍手が多すぎてプログラムは半分でカット。その後、300人が残って、全曲のレコーディングを聴いていた——やたら静かだった。スイスでは食べ物がとても美味しくて、僕はエッグ・リキュールとバーレンファンゲ（蜂蜜から作られていてすごく強い）をそうとう飲んだ。ケルンではたくさんの会話や議論。シュトゥックハウゼンはすばらしい、すごく知性があり情熱的だ。¹²⁾ ケルンでの活動の多くはかなりの破壊行為。（そしてだからこそ）彼らはスタジオにすごい機器をそなえて、とてもきちんと整えられていて、まるで、宇宙船のなかであるかのように、とても秩序正しくふるまっている。ヨーロッパ大陸の郊外からは時代と連綿と続く洗練の印象を受けた。次なる成熟はほとんどないとしても。ひょっとするとスペインやイタリアには、原始的な成熟があるかもしれない。ソレハキワメテ洗練サレタ血デハナイ。祈祷。ケルンでは大成功。僕たちは、ケルンの電子音楽のはじめての発表に先立って出演した。¹³⁾ 彼らは舞台奥のほうからこの反応を見守っていた。一人が言ってたけど、「生気がない」だってさ。ハハハ。祈祷。昨晩はT夫人のところでディナー。ポタージュ、魚、キジ、サラダ、チーズ、ストロベリー添えシャーベット、シャンパン、パティスリー等々、音楽つき（僕）。これはそのまま、キワメテ派閥的ナ仕事の打ち合わせになった。打ち合わせというのはおしなべてそういうもののようだ。

パリは嫌いだ。ここで好まれるのは、一般的な人間だ。まったくのところ、秩序というものの、女性的と言われるもの、連携とかいうものは、僕をまぬけにする。それからママ、ブリュッセル、ロンドン、チューリヒにも行きます。最後はミラノ。ミツバチのように忙しい。明日ここで、17分の曲を演奏する。ニューヨークでやったプログラム。シュトゥックハウゼン、2台ピアノ、休憩、繰り返し。

大好きだよ、きみのD

〈10〉〔1955年11月4日（消印）〕 書簡 Tudor から Karlheinz Stockhausen へ 【SD114-115】

親愛なるシュトックハウゼンへ

きみの新作が届かないので、がっかりしている。僕があまり手紙を書かないので、仕返しなのかい？ [……中略……] 僕たちがヨーロッパに行けるかどうかは、まだわからない。もし行けるとしたら春、3月末か4月になるだろう。僕は行きたいよ！ 君の存在は、僕の頭のなか、いや、僕たちの頭のなかで、まさしく生きていて、刺激になっている。プログラムを全部組み終える時期になったけれど、〔ピアノ曲〕6番と7番を含めることができなかったのがとても残念だ。[……中略……] 8番についてのコメントをということだった。とても生き生きして、よくできている。このことを君に言うとは思っていなかったけれど。この曲にはびっくりさせるような効果がある（きっと喝采が起こるだろう！！）。とりわけ他の曲より、動きの場の内側へと人を引き込むと思う。それから、とても強力な心的状態がある、5番と6番と同じように。これはとても重要なことで、僕はこれは現在の「道」だと思っている——素材に精密に精通すればするほど、より高次の精神的状態がなんなく開示されるのだ。きみと同じように、クリスチャン・ウルフやモートン・フェルドマンも、いちじるしくこの質をそなえている。

僕が気づいたのは、6番は、ハーモニーの「タイプ」について強い縛りがあるということだ（第一印象として）。このことが、ダイナミクスの変化に過度の注目を呼ぶような気がする。これは、君の最初の電子音楽作品に関して、僕が君に伝えたのと同じことだよ。たぶん、僕がこの6番を演奏するときには、この問題は解決するのじゃないかな——たぶん僕はこの作品のさまざまな相をまだよくは把握していないから。

きみの電子ミサ曲〔《少年の歌》〕についてもっと教えてほしい。その構造が、ソナタとかツィクルス等のような形をとらないようにする方法を見つけているのかい？

[……中略……]

僕たちのツアーがヨーロッパを通ることになった場合には（場合によっては帰路で）、すぐにきみに知らせよう。もし僕にもっと作品を送ってくれるなら、12月1日までにニューヨークに着けば落手できる。

来る年がきみにとって大きな収穫となるよう祈っている。それから、再会できるときまで、友として僕のことを覚えていてほしい。

奥さんにどうぞよろしく

デイヴィッド

〈11〉〔1956年？〕 鉛筆書き草稿 Tudor から Wolfgang Steinecke へ 【DTP15-2】

親愛なるシュタイネッケ博士へ

まず、お手紙とご提案、ありがとうございます。また、ケルンとフランクフルトでの録音のためにお骨折りいただき、感謝しています。また、シュトローベル博士とカール・アマデウス・

ハルトマンにも連絡をしていただけるとありがたく思います。アイメルト博士には私から手紙を書きます——フランクフルトについて彼に連絡をすればよいのですね？

あなたのご提案についての私の考えは以下のとおりです。新しい音楽についてセミナーを3回開くのはどうでしょう。ブーレーズ、シュトックハウゼン、ケージ、それから若いアメリカ人たちの新しい発見のリアリゼーションについて討議します。+この3回のセミナーを6回にもできますが、それは次の条件によります。a) 各セッションの時間、b) ディスカッションのために演奏にとりこんでくれる学生たちがいるかどうか。+これらの作曲家のなかで出版された資料がない者もあるので、セミナーはおそらくデモンストレーション的な性質のもの（あるいはレクチャーのみ）にならざるをえないでしょう。ですから～。以上の考えがあなたのご希望に沿うかどうかについて、それからセミナーを運営するあなたのお考えについて、可能なきに、またお知らせいただければ幸いです。

スタジオ・コンサートについては、ステファン・ヴォルペの他に、シュトックハウゼンの《ピアノ曲1番～8番（または5番～8番）》と、ジョン・ケージの《易の音楽》（40分）をなんとかでも発表したいという希望をもっています。《易の音楽》はヨーロッパではまだ聴かれていない重要な作品で、私のセミナーを強調してくれるはずです。また、ガッツェローニ氏とのブーレーズのソナチネの演奏も、よろこんでやりましょう。++これらに加えて、アメリカのクリスチャン・ウルフ、モートン・フェルドマン、アール・ブラウンの新作も提供できます。ステファン・ヴォルペに関しては、そちらのアレンジについて、まだ何も聞いていません。

「伝統的」現代音楽の9セミナーに関しては、上記の作曲家たちの演奏がありますので辞退したいと思います。こちらだけでひじょうにエネルギーが要求されるので。もし、バルトークやストラヴィンスキー、あるいはシェーンベルクの作品もあわせて扱うとなると、たった10日間でこれだけたくさんの題材を十分に扱うのはかなり困難です。これらの曲は他の方に担当していただけないでしょうか。

++また、ブーレーズとマデルナとのスタジオの夕べにも参加できます。

ドイツを再び訪れることは私にとって大きな喜びです。ダルムシュタット講習会に参加できることを期待をもって楽しみにしております。

敬具

もしよろしければ、スタジオ・コンサートに関するあなたのお考えについて、さらにご示唆いただければと思います。

〈12〉〔1956年?〕 鉛筆書き草稿 Tudor から Herman Scherchen へ 【DTP51-7】

親愛なる S 氏へ

12月18日付けのお手紙、ありがとうございます。そして、お返事が今になるまで遅れてしまい、申し訳ありません。

やっと、今年の9月と10月にヨーロッパに行くことができることが確実になりましたが、私の

訪問に関心をもっていただけるでしょうか。P「Ex. recs.」〔アンリ・ブッスール《習作》か？〕なら、私にとって最も魅力的です。10月のあいだはどうでしょうか？ この機会に私が演奏するのは、アメリカのアールB〔ブラウン〕、JC〔ジョン・ケージ〕、MF〔モートン・フェルドマン〕、CW〔クリスチャン・ウルフ〕（+ほか）の約10作品、それから、PB〔ピエール・ブーレーズ〕、BN〔ボー・ニルソン〕、HP〔アンリ・ブッスール〕、KS〔カールハインツ・シュトックハウゼン〕（もちろん、もっと他の現代曲も演奏したことがあります）の作品です。私にとって、古典音楽のレパートリーを保つことはかなり難しいのです。なぜなら、関わってくる時間概念が（とくにアメリカの作品を演奏する場合）、ひじょうに異なるので、演奏者がリズムの組織をまったく変えなくてはならないからです。これまで私は、古典音楽を演奏するのは特別な場合にのみ限ってきました。ちなみに、ジャズは弾きません。

作曲家のジョン・ケージは私とともにヨーロッパを訪れますが、関心はおありでしょうか。私たち二人で、2台のピアノのための音楽を「空間的」上演で演奏します。この件について、またご連絡をいただければたいへん嬉しく思います。

敬具

〈13〉1956年5月14日 書簡 Tudor から Karlheinz Stockhausen へ 【KSD131-132】

親愛なるカールハインツへ

きみのこのまえの手紙¹⁴⁾は、まさに「天使の信書」のようだった！ 来るヨーロッパの事業計画に関して、そうとうなウツのまっただ中にいたときに届いた——きみは何のことかわからないだろうが、こんどのドイツ行きは、作曲家ステファン・ヴォルペとも関わっているからだ。僕はある程度彼と共同作業をしなければならない。彼はアメリカの音楽について話す予定だ（ケージ等を含む）。それで、正直なところ僕は、彼が広めるに違いない、誤った情報をいちいち全部訂正できるかどうか自信がない。だから、違ったタイプの仕事の提案をもらえて、ものすごく嬉しかった。今まで、〔ピアノ曲〕5番～8番について何も言っていないことは許してほしい。これらの曲を5月30日にニューヨークで弾く予定なので、それまで待ってから、僕の完全な印象をきみに伝えたいと思っている。今は、6番に懸命に取り組んでいて、とても魅了されている。まだ手を離すまでにはなっていないが。近々、僕たちは大きなコンサートを開く予定だ。5番～8番、ウルフの組曲（プリペアー・ピアノ）、フェルドマンの弦楽四重奏のための曲、ブーレーズとフェルドマンの2台ピアノ曲、ケージの8台のラジオの曲、4台ピアノの曲。けっこうたいへんな仕事だ——プロのマネジメントなしでやっているから。コンサートについてのシュタイネック博士とのアレンジはまだ満足いくところに達していない——大きい曲（《易の音楽》、5番～8番）を演奏できるような晩を僕にまかせてくれるよう頼んでいるところだ。彼は、きみの第1サイクルだけを弾いたらどうかと言うのだが、きみは第2サイクルのほうがよくはないか？ 1番～4番はダルムシュタットですでに演奏されていなかっただろうか？（ブーレーズのフルート・ソナチネ等のコンサートのとき）それからスタジオの夕べにもっと時間をくれないか頼んで

いるところだ。¹⁵⁾ [……中略 (ヨーロッパ訪問の経路やスケジュール) ……] いずれにしても、きみと一緒に仕事ができるように、ケルンには7月7日か8日には行けるよう計画する。とても楽しみにしている。

きみと奥さんに心より挨拶を

デイヴィッド

〈14〉1956年6月14日 書簡 Tudor から Karlheinz Stockhausen へ 【KSD133-134】

親愛なるカールハインツへ

すばらしい手紙をどうもありがとう！ きみの家に泊めてもらえるとは、なんて親切な申し出だろう。きみやご家族に迷惑にならなければいいのだが。食事は自分たちでなんとかできと思う。やっと状況が固まってきたので、僕の旅程を知らせておく。これが確定であればいいのだが。[……中略……]

今、あれこれの準備でとても忙しく、ピアノをしっかりとさう時間がとれないでいる。もし、きみの曲を手中におさめるのに1日か2日かかってしまっても、勘弁してもらえるだろうか。いずれにしても、二人で一緒に問題に取り組み、そして、ヒントになるような新たな土台を僕の演奏のなかに見いだしてもらえたら、と願っている。

さて、やっと〔ピアノ曲〕6番を初めて演奏して¹⁶⁾、僕の確定した印象は、これはほとんどとてつもない！というものだ。ジョンも同じように感じている。友人たちの多くは「印象的」だから好きだと言い、一方、嫌悪感を起こさせるし攻撃的だから嫌いだという人もいた。僕は、聴衆がこのような大きな曲に対する準備ができていないと感じた——彼らを驚かせただろうし、絶対にこのアイディアに馴染めない者もいるだろう！ 今回の演奏にたいして、どの程度の異議が申し立てられるかまだ僕はわからない——まずはなかったけれど、でも、テンポの変化は難しかった、オリジナルのテンポの60-110で弾いた（いろいろ理由があつて。いずれ説明するよ。）にもかかわらず。だけど、これが初演になったと思うし、テンポの意識については回を重ねていけばもっと明白になると思う。第1頁はその効果はものすごく華麗で、そのあと、聴衆の注意力はがたっと落ちていた（このことは、次回以降の演奏でなんとかできたらと思っている——どうなるか）。僕がとくに嬉しいと思ったのは、曲の世界を詳しく体験するなかで、僕が初稿について指摘したハーモニーの効果の均質性が完全に解消していることを発見したときだ。つまり、補い合う音程が干渉していないということで、僕はこれは君の大きな成果だと思う。また、構造の上で、流れが静的なものから離れているのもいいと思った。そういう場所では、ときに君の詩的な考えが強く支配しすぎのように思えたけれど、7番のように（これは、批判というつもりではないよ。僕はただ、客体が詩のなかで消える傾向について指摘したいだけだ。）僕の感じでは、6番は本当にすばらしいし、もっとこの曲の経験を深めたいと思わせる。それなのに批評家たちときたら——一つお楽しみに同封しておく——きみにアメリカの新聞について話したことはあっ

たね——他の評はもっとひどいよ！

きみにはほんとうに感謝しなければならない。僕の契約をまとめるのに尽力してくれて、手紙であらゆるアドレスや連絡先を知らせてくれた。僕はその全部に手紙を送ったし、その他のところにも書いた——まだ返事のないところもある！　ありがたいことに、今回の旅行中に手がけたと思った契約はすべてもう済んだ。

たぶん、僕の手紙の調子から、少し「神経質になってる」とわかるかもしれない。空の上の逗留で、気持ちが上向きになるといいのだが！

それでは金曜日に！

草々

デイヴィッド

〈15〉1956年6月22日　手書き書簡　Tudor（ハンブルク）から Mary Caroline Richards（ストーニー・ポイント）へ　【MCRP26-1】

僕のかわいいひとへ

ハンブルクはとても寒い。コートを持ってくればよかった。フライトは心地よかったけれど、でも疲れたし、期待していた素晴らしい夕日は見られなかった。知らされていたアムステルダム—ハンブルク間の列車の時刻が間違っていて、急いで午後2時30分に出発することになり、ハンブルクには午後11時に到着、ほんとうにとっても疲れた。レコーディングはとてもうまくいって、今日はヒューブナー博士と秋のプランについて話したところだ。予定はまだ未確定。というのもたった1000マルクしか払えないというので。これでは移動だけで足が出てしまう。曲目はもっとはっきりしない。彼はヨーロッパの室内楽作品を入れたがっていて、かなり気難しい。ある作品が他のよりもよいと信じ込んでいると、自由なアイデアが表明されても、心の扉が閉じてしまう、わずかな微笑みとともにね。いつもこういう時にはがっかりする。——ヨーロッパでの最初の日々はいつもこういうものなんだろう。ここでは、なんでもすぐに通訳される。通りの人々は肩をいからせ、鋭いまなこであらゆる方向をにらみながら歩いている。ここから何が生まれるというのだろうか！　昨晚食べたのは、牛のテールスープ、とても美味、それから仔牛のフリカッセ、アスパラガスとバターライス添え、うえっ、そしてデザートにフルーツつき（皮をむいたチェリー！）アイス。まだ25パーセントの税をとられる。だから僕がお金を手にする前に1957年になってしまうだろう。今すぐ、ケルンに出発しなければならない。あちらはもう少しましだといいいのだが。11月のことはどうなるか、今これを書いている時点では、彼らの諸々の考えに合わせる気になるかどうかかわからない。

僕のすべての愛を、家で食べる豆とサラダバーネットを思い出している

デイヴィッド

〈16〉1956年6月27日 手書き書簡 Tudor（ケルン）から Mary Caroline Richards（ストーニー・ポイント）へ 【MCRP 26-1】

いとしいきみへ

急いで走り書き——バーデン・バーデンへ出発するところだ。今日の天気はすこしました——今までずっと寒くてじめじめしてひどかった。ほとんど家から出ず、馬鹿みたいに仕事をしている。何の見通しがあるわけではないけれど、この旅行が終わるまで働く。ストックホルムに関して少しやっかいなことがあるが、とにかくやり抜くつもり。金銭的にはそこそこだ。行く途中、ちょっとだけボートに乗れる！ カールハインツとの話はすばらしかった。彼は興味深いことをしようとしていて、ジョンや僕たちの友人たちを別にすれば、彼が世界で唯一の作曲家であることは明白だ。ピエール〔・ブーレーズ〕とその「とりまき」についてのゴシップがたくさん。カールハインツとアイメルト博士夫妻から、ジョンによろしくと言われた。新しい電子音楽作品はまだ聴いてないが、来週聴ける予定で、そしたらジョンに書いて知らせよう。ドームが建設されていくのは喜ばしいし、それを見ているのも楽しい。子猫たちは？ 掃除のおばさんには参っている。お互いにまったく理解できないとしたら、もういったいどうしたらいいかわからない。S夫人がいないので、たいてい缶詰で食事。一度だけ、「カレーライス」に3時間と9マルクをつぎこんだ——家にいるときとはもうまったく違う。気候がぜんぜん夏らしくない。しばしば家と、花とか果物のあれこれが恋しいなあと思う。さて、南へ行くと、また違っているだろうか。うん、そうあってほしい。

きみを愛してるよ

デイヴィッド

〈17〉〔1956年？〕7月6日 手書き書簡 Tudor（ケルン／フランクフルト）から Mary Caroline Richards（ストーニー・ポイント）へ 【MCRP26-2】

いとしいきみへ

先週は手紙を書くチャンスがなかった。ビルマン夫妻宅を訪問して忙しかったので。毎晩遅くまで起きていた。きみに心からよろしくということだった。ジョンたちにも。バーデンのことを話していなかったね——ラジオ局は街を見下ろす小高い丘の上に位置していて、そのそばの古風なホテルに泊まった。エレガントな部屋で、薄地のカーテンの両側にドレープがあって、どちらも引きひもがついている。ホテルにはいいステーキがあったけれど、街の食事はまずかった。もう最悪で、気分が悪くなった。こちらではどこも街は旅行客であふれている。野菜のために行動を起こし、市場で少々買い物をした——2インチくらいの柔らかい新人参、パセリ、まだ小さいセロリ、タマネギ、どれも一山ずつ。とてもおいしかった。スウェーデンの印象はすばらしかった——可能ならぜひ戻りたい（11月ではなくて）。フランクフルトには着いたばかり。大都市でショッピングにはよさそうだけれど、僕にはかなりがっかりで、できるだけすぐ立ち去りたい気

分だ。きみが気に入るような古代ローマ陶器のコピーを見つけた——ずんぐりした水差しで、底は太く、細い首に向かって絞られており、注ぎ口は2つあって、裏側のは広く、表側のは狭い。長く美しいハンドルがついている。同じようなものをもっと見たかったが、博物館は閉まっていたので、かわりに建物を囲んでいる堀や池にいる魚を見て、それから白鳥をながめた。それから街の陶器店に行ったけれど、足をとめるようなものはなかった——あまりに醜かったのでぜんぶ打ち壊したい気分だったよ。ゲーテハウスに行った。戦争で壊れたあとと再建されたものだけれど、なかなかのものだった。とても明るく楽しい。フランクフルトの古い建物のほとんどは、陰鬱な19世紀に改装されたもので、とても重苦しい。僕がいちばん驚いたのは、ゲーテの眼が茶色だったということ。[……後略（食べ物について）……]

〈18〉〔1956年〕7月15日 手書き書簡 Tudor（ダルムシュタット）から Mary Caroline Richards（ストーン・ポイント）へ 【MCRP26-2】

いとしいきみへ

大量の注文がはいるなんてすごいニュースだ。きみはそれにかかりつきり？ スtockホルムからの手紙は届いただろうか——ドミニクに送ってくれるよう渡したのだが。こっちはひどく忙しくて、手紙を書くことができなかった。分刻みでやるべきことが何かあり、コンサートが日中ずっとそして夜遅くまであり、朝は早くから騒がしい。食事は信じられないほどまずくて、人が多いので何か食べるものを手に入れるのに時間がかかる。僕はここが好きだと言いたいけれど、あまりに人が多すぎる。プログラム全体もかなり普通だ（もちろん派閥）。子猫たちはまだいるのかな？ それから僕たちのすてきな休暇のプランを考えてくれている？ 僕にはそれが必要だろうなあ。

ここのすべての活動が僕の仕事への意欲をかきたてて、ときどき、自分ならここをもっとラディカルに変えることができるんじゃないだろうかと思うこともある。妄想だけれど。また、ピアニストにとっては、ここにはましな機会というものではなくて、同じ古い曲を弾かなきゃならない。家にいるよりももっと、自分が嫌になるよ。きみの写真だけど誰かにいいのを撮ってもらったかどうか。そしたら僕はそれを飾っておくのに——きみが写真嫌いなものだから、僕が持っているのはバーベキューのときのだけだ。万事はだいたいうまくいっているの、今言ったこと以外は不満はない。大量の仕事がどんどんくるけれど。果物がここにはほとんどないので、僕は、オレンジを一つ、あえて食べずに数日間目の前に置いておいた。もう次のオレンジを目にすることができないんじゃないかと思ったから。お湯が午前中ごく短時間しか出ないから、シャツが洗えない——なんとかするために、一回、明け方に起きなきゃいけなかった。陶器づくり、がんばれ！

きみにばく的愛すべてを

デイヴィッド

〈19〉〔1956年?〕10月16日 手書き書簡 Tudor から Henri Pousseur へ 【HPC-correspondences-David Tudor】

親愛なるアンリへ

ヴァンジェルメ氏との橋渡しをどうもありがとうございます。このようにまたすぐに INR〔ベルギーの放送局、Institut National Belge de Radiodiffusion〕で私を使ってもらえるとはおおいに驚いています。

日程に関しては、11月21～23日か、12月16日を彼に提案しました。これは私がブリュッセルにいられる唯一の日程です。ブーレーズとのコンサートは、予定では12月15日に設定されています。

他でも言っていますが、とくにブーレーズとヴァンジェルメの二人には、あなたの《変奏曲1》を提案しました。INR ではシュトックハウゼンの〔ピアノ曲〕5番～8番も。ブーレーズの第3ソナタはまだ終わっていません。

今の時点では、《変奏曲1》については、私がこれまでにした作業のほかには、あなたに多くを語ることはできません。また多くの部分について研究中です——だいたいのところ、終わるまでにはまだやるべきことがたくさんあります。今のところ、私が少し難しいと思うのは、テクスチュアがかなりコンスタントであるという点です——でもこれはいずれすぐに解決するでしょう。ご存知のとおり、私は長い曲とは相性がいいですから！

《変奏曲2》に関しては、あなた次第です。あなたの好きな曲をどれでも。今の時点では、なにか困難な問題で考え込みそうなことはありません。もちろん《キャラクター》に関しても同じです。もしパリのコンサートに出したいなら、A) ピエールに知らせ、かつ、B) できる限り早くスコアを私に送ってください。ピエールに連絡する時には、彼のために予測される演奏時間を必ず知らせてください——1曲ずつの長さ、そうすればピエールがそれに従って計算するはずですよ。

いろいろなところであなたの作品を求められます！ だから、どの曲が最もよいプレゼンテーションになるか、決めてください。もちろん私はあなたの希望に沿うつもりです。今回のツアーの多くの場合、私が割ける時間は最大10分です。ただしパリではおそらくもう少し可能でしょう——ピエールと交渉してください。

《キャラクター》を私が受け取る締め切りですが、パリ公演のみでよいなら、どんなに遅くとも、11月24日までにカールハイツ気付で私に送ってください。もしもっと早く完成したら、ニューヨークに送ってください——ただし、その場合は11月14日以前に私に届いている必要があります。

より確定した情報がいり次第、またお知らせします。お会いする機会があればと願っています。そうすれば、あなたの曲について、一緒に研究することができるでしょう！ 敬具

デイヴィッド

〈20〉1956年11月4日 タイプ打ち草稿 Tudor から William Glock¹⁷⁾（ロンドン）へ 【DTP 15-8】

親愛なるグロック様

BBC テレビに関するとてもよいお知らせをありがとうございました。私自身からの提案は次のとおりです。第1に、プレパレーションのデモンストレーション（ケージ氏による）と、その後短い曲を2つか3つ。第2には、楽器内部で手やバチ等を使って音を出す方法の紹介をして、その後、離れて置かれた2台のピアノでそれを実演。こちらは聴きどころも見どころも多くあります！

プレパレーションのためには2時間はみておいたほうがいいでしょう。実際収録するスタジオでおこなう必要はありません。上のプランでは3台のピアノが必要になり、そのうちの1台だけがプリペアされることになります。切り詰めれば2台だけでもいけるかもしれません。その場合は、1台で事を進めているあいだに、もう1台で静かにプレパレーションを取り除くという問題があります。

出演料については30ギニーなら十分です。また英国には、ケージ氏と私を仲介するエージェントはおりません。

IMA のプログラムについてですが、こんどお手紙をいただけるときに、おそれいりますがお知らせいただけないでしょうか？——もっていた書類をうっかり破棄してしまいましたので。記憶によれば、プログラムにバラケのソナタが含まれていたと思います。ですが、たいへん申し訳ありませんが、お約束どおりこの曲を演奏することはできそうにありません。この曲にはまださらに多くの時間が必要で、さらに、作曲家との多くの打ち合わせが必要なのですが、私は彼とは12月14日まで会えない予定です。したがって、この曲をロンドンで演奏することは賢明とは言えないのです。

どうか、シュトックハウゼン、プッスール、ボー・ニルソンを考慮に入れていただけますよう。（もしもまだ入っていないのであれば）

もし曲の解説をお望みでしたらお知らせください。というのも、作曲家のうち何人かについては、解説を補充する必要があると思いますので。それから、労働許可をとるためにはどのような行動をとればよいのか、教えていただけないでしょうか？

成功を祈って！

敬具

〈21〉〔1956年〕11月28日 手書き書簡 Tudor から Henri Pousseur へ 【HPC-correspondences -David Tudor】

親愛なるアンリ・プッスールへ

もっと早くに手紙を書くことができず申し訳ありません。この5日間で5つのコンサートがあったので時間がとれませんでした。《変奏曲1》はまだうまくいっていません。3回演奏してみ

て、自分がこの曲を適切に演奏するには、まだまだ多くの作業が必要だと判断を下しました。¹⁸⁾ そのため、ブーレーズとベリオの両方に、かわりに《即興曲と変奏曲2》をプログラムに入れてくれるよう頼みました。これならば、私はずっと少ない作業で、より効果をあげることができそうです。このことがあなたをとっても失望させないといいのですが。もし、パリに間に合うように《変奏曲2》が完成する可能性があるなら、もちろん全曲を演奏したいと思います。私への手紙は、ベリオ気付、Via Moscatti 7, Milano (12月3～8日) か、W.ロツツラー博士気付、工芸博物館、Ausstellungstr. 60, Zürich 5 (12月10～12日) へお願いします。12月13日にはパリにいる予定です。それから、12月16日にはブリュッセルのINRでレコーディングがあります。ここのプログラムは単に「ピアノのための習作」としてあります——もしこの時まで《変奏曲1》も弾けるようになっていたら、3曲すべて録音すると思います（そうでなければ2曲のみ）。演奏時間をまたお知らせします。もしあなたが同意できないなら、どうか知らせてください！ 敬具

デイヴィッド

〈22〉1957年3月12日 書簡 Tudor から Karlheinz Stockhausen へ 【KSD161-162】

親愛なるカールハインツへ

帰国してからというもの、やることがたくさんあったので、〔ピアノ曲〕11番についての作業はあまり進んでいない。でも、グラフィックの面はすべて大丈夫で、満足している。かなり難しいことが若干ある。とくに、ダイナミクス+テンポが変わる場合。でもさいごには、期待どおりになるだろう。コピーのなかに2カ所ミスを見つけたのだけれど、残念なことに、もう今は見つけられない！ たぶん君がもう見つけているだろう。〔オットー・〕トメクが僕に注記の翻訳を送ってくれたが、そのなかに僕が全然理解できない文章が一つある。「e」の項は次のようになっている。「ペダルは一つの pause から次の pause まで踏み続けてもよい。」この意味について、どうか説明してくれ！ おそらく「pause」という語についての混乱があるのではないだろうか。英語では pause はフェルマータか「待機」を意味する。休符は rest と呼ぶ——ごく参考までに。他の訂正についてはもうトメクに送った。もしよい方策がみつかったら、注記にスコアの立て方に関して何か指示をつけることを忘れないように！ 僕のコピーでは、楽譜の上のほうのグループがほんとうに何度も見えなくなるんだ！

シュタイネッケから手紙があり、今年また行くことに同意した。だけど、何が起ることやら、誰が知る??? 彼は、きみと僕が討論するというプランに固執するつもりなのだろうか？ たぶんこの答えは7月16日に明らかになるのだろう。彼から7月18日に11番の初演を頼まれて、僕は引き受けた。2回演奏することを提案して、彼からきみに連絡してくれるよう言っておいた。もし知らせがなくても、たぶんきみ自身からそう求めるだろうね。あるいは、もしきみがこのアイデアを否認する場合には、別の可能性としては、もうひとつ別のコンサート、初回とあまり時間的に離れていないコンサートで演奏するということもあるだろうか。

ダルムシュタットの後、ヨーロッパに滞在する予定だ。9月にはストックホルムにいないかならない。もしコンサートがあるなら、その後ももう少し滞在して、10月末までいるかもしれない。到着の日についてはわからない——6月15日以降の日に行くことができると思う。お金が十分でる可能性があるんで、僕の妻も行けるだろう。

ジョンと僕はちょうど、小さいコンサートツアーから戻ったところだ。かなり成功だった。4月～5月にもコンサートを開くチャンスがある。きみの曲をプログラムに載せた——また、5番、6番の一部、7番と8番。6番についてはまだ研究し続けなければいつも感じている。とくに今、最初の頁は「ピリッと」してきたと思う。それから11番に真剣に取り組みは始めている。4月の初めにニューヨークでコンサートをする機会があるかもしれないので、完了させなければ。以前、4台のピアノを使って、2台をあるフロアに置き、2台を別のフロアに置くというコンサートをアレンジしようとした。助成を得ることができなかった、というか、十分得られなかった。

ジョンはまた作曲している——僕たちはすでに1曲を2台ピアノで弾いた。これは大きな驚きを誘うよ、完全に静的。たぶん、君もすごく驚くだろう。なぜなら、きみは以前、彼の音楽が静的だと考えていたからね。また彼はピアノ・コンチェルトにとりかかっている。こちらはまさしく正反対で、僕が思うに、ワイルドだ。[……中略（ヨーロッパでのケージの曲のコンサートの計画について）……]

ブーレーズがこっちに来ていて、彼と会うのはとても楽しかった。ちょっとした「事故」があった。ある晩、ブーレーズと話していたら、彼は振幅が最も重要な要素だと言い切った——君の時間＝空間のアイディアを支えにしてね。ジョンは当然、ある一つの要素を他のものよりも重要だとあえてするなら、音価が最も重要な要素だと主張した。袋小路。ブーレーズはたぶんシェーンベルク流の道へと傾斜していつているのではないだろうか！ いずれにせよ、沈黙を生む音、あるいは、音を生み出す沈黙のあいだで選択がなされるとき、多くが示唆されると僕は思っている。

できるだけ早く11番ともっとよくつきあって、また連絡する。きみとドリスに幸いあれ。彼女に、いつか聖ニコラスについてぜひ聞きたいと伝えてほしい。

デイヴィッド

〈23〉1957年6月4日 書簡 Tudor から Karlheinz Stockhausen へ 【KSD168-169】

親愛なるカールハインツ

きみの忍耐に感謝！ ほんとうにきみはものすごく親切なやつだ。ぼくがこっちにいるあいだ、きみはずっと待っていてくれる、どんな卵がかえるかわからなくても。

[……中略……]

きみとシュタイネッケのあいだにトラブルを起こしてしまって本当に申し訳ない。¹⁹⁾ 最初から、僕は、ニューヨークで《ピアノ曲11番》を演奏できると思ってしまっていたのだが、それをシュ

タイネッケ博士に言わなかったのは、僕の馬鹿なミスだ。ことの重要性を過小に見てしまっていた——これからは、こういったことにはもっと十分に気を配るようにする。君を傷つけていなければいいのだが。彼にはもう手紙を書いた。

ピアノ曲については他からは何も聞いていないが、すごくよかった。聴衆は2回とも身を乗り出していた。すごく華々しい。1回めは $5\frac{1}{2}$ 分、2回めは $8\frac{1}{2}$ 分。どちらも全部のグループは使わなかった。とても強く統合されているので、最大の変化を得ることは難しい——だから僕はそれぞれの回に異なるテンポ基準を使うことにした。とくに気に入っていることは、曲が終わったとわかったときに、とてつもない感動があることだ。連続性があるので聴き手もこれがわかる。皆はピアノを取り囲むように座っていて、興奮した雰囲気だった。僕の友人たちは皆、この曲に感じ入っていた。このコンサート全体についてはきみに会ったときに話そう。これはとても急いで計画されたもので、準備を始めてから終わるまでたった $2\frac{1}{2}$ 週間だった（だから、曲についてきみと相談しなかった）。7と4を読み間違えてしまって、ひどく速くなり、スコアを端から端へと見ることになった。プログラムの関係で6番を入れたけれど、たぶん僕がこの曲を弾くのはこれが最後だろう。曲はよく受けとめられて、今回は16分という長さにも文句はでなかった。だけど、全体として、きみの感覚は正しい。テンポが次第に加速し、ダイナミクスの幅が減じるにもかかわらず、音楽は変化しない。

[……中略……]

きみとドリスの幸せを祈る

それからジョンからよろしくと言っている

デイヴィッド

〈24〉〔1957年6月7日以降〕 鉛筆書き草稿 Tudor から Mr. H へ 【DTP61-4】²⁰⁾

親愛なるH様

B〔ジャン・バラケ〕のソナタの演奏を断念したことについて、心よりお詫びを申し上げます。（ニューヨークで）お話をしたあと、この曲と格闘して多くの時間を費やしましたが、私が思いつくかぎりのどんな攻略法をもっても、人前に出せるだけの結果を生みだせるには至りませんでした。まったくのところ、先延ばしにするのは最もまずいことだという結論を出さざるをえませんでした——もしかすると、このソナタの音楽のかなりの部分はまだ作曲家の考えのなかにとどまっていて、紙のうえに表現されていないのかもしれないとも考えさせられました。

この曲が私を非常にとまどわせるものだとよく認識できるまでに、1年かかりました。この曲の背後には、巨大な構造的思考があり、それは、具現化しようという望みの前につねに横たわっていました。しかし、私がここに投入することのできたあらゆる方策をもってしても、美学的に困難と思われる、という結論しか生み出ませんでした——そこで、私はこの作品にさらに関わり続けるのは愚かであると認めねばならなかったのです。

このことが不首尾に終わってしまい、あなたに対してもB氏に対してもひじょうに申し訳なく思います。あなたとB氏をこのように長く失望させつづけてしまったことに、たいへん恥じ入っております。しかし、これほどまでに知的な期待にみちた作品をこれまでには知りませんでしたので、この現実にはひじょうに失望しております。私ではなく他に、この曲をもっとうまくできる方が見つかることを心より祈っております。

このような状況では、「前衛フェスティバル」への私の出演についてお考えが変わる可能性もあるでしょう。ですから、ポリエリ氏からいただいている契約書については、あなたか彼から了解とうかがうまでは、サインしないようにします。あなたがフランスの曲をプログラムにのせてほしいと希望されていることは覚えておりますので、Bのかわりにブーレーズの第2ソナタならご提案できます。もう一つの可能性としては、プッスールの変奏曲1 & 2もあります。

Vegaに関しては、ブーレーズのソナチネに関する手紙を受け取り、返信しました。ただ、その手紙にはバラケについては何の言及もありませんでした。また、アデス氏が3月に送ったとおっしゃっている手紙はまだ受け取っておりません。

私がフェスティバルの成功を望んでいますことをどうかおわかりいただけますよう！ 敬具

〈25〉1957年7月10日 書簡 Tudor から Karlheinz Stockhausen へ 【KSD171-172】

親愛なるカールハインツへ

行くことができなくなって、僕はとてもがっかりしている。楽しい時をすごすのを楽しみにしていたのに——ダルムシュタットでのばか騒ぎではなく。また、きみに曲を聴いてもらえないこと、演奏されないかもしれないことが申し訳ない。めざましい曲なのに。

原因は、複雑な腎臓のうっ血だった。最初に疑ったような感染ではなかった、ありがたい！ 3日と4晩、少しでも動くとうとうしてよいかわからないほどの痛みがあったが、今日は少しよくなった。ここで寒い夜どおし仕事をしていたときの寒気から始まって、、、ツアーの準備のためにピアノのところで長時間過ごしていたときだ。治まっても、たぶん体力が落ちているので、ダルムシュタットは問題外だ。

〔……中略（《ピアノ曲11番》の印刷譜の校正について）……〕

ダルムシュタットの友人たちにどうかよろしく。それから、もし機会があったら、シュタイネッケに僕がほんとうに心から謝っていたことを伝えてほしい——僕の急な不在で彼をととても悩ませてしまっていることはわかっている。彼にはもう手紙を書いたが、もちろんそんなことではこのかわいそうな人の重荷を軽くすることにはならない。

それからプッスールにも謝罪を——これで2年連続で彼の曲が演奏されないことになる！ 僕は彼の曲を相当に研究してきて、今までにヨーロッパで弾いたどんときよりもずっとよく鳴るんだ。こちらではあまりうまく受けとられなかった（皆、「文学的内容」について語る）。ヨーロッパの聴衆だったらきっと大丈夫だと思っていたのだが。

僕の想いはダルムシュタットのきみとともにある。きみにとってよい仕事とよい時間を！

きみとドリスに会えなくて残念だ。9月に行けるかどうかはまだまったく未定だ（僕の体力による）。だけど、僕はとても行きたいし、きみに例の曲を聴いてほしいと願っている。ジョンは9月に行けるだろうと言っていた。

デイヴィッド

〈26〉1957年7月11日 タイプ打ち書簡 Tudor（ストーニー・ポイント）から Mary Caroline Richards（メキシコ）へ 【MCRP26-2】

ベビー、僕の心

今は朝の6時で、家の窓から、太陽の光がシアターの場所に差しこんでいるのが見える。

実は、すこしつらい時を過ごした。きみがここにいてくれて、苦痛を共有してくれさえしたら、と思った。意識が僕に対して毎日大きな声で語りかけ、それで、良くも悪くも現実の状況をつかむように気をつけながら仕事し続けた。心の底では震えながら、それでももちろん、できるだけ前向きにつとめた。そうしたら先週の土曜日の夜、狂ったように仕事をしていた真っ最中に、心の底で緊張が突然ゆるんで（必死に伸びていた植物が根を切られたように）、すべてがまやかしだったと悟った。そうして初めて、その瞬間、僕がすべきさまざまな仕事があった。演奏すべき作品、おこなうべきレクチャー、レクチャーのために準備する資料、リハーサルの準備——ひとつとして正しくできていなかったんだ。人間のあらゆる魂の力から離れて、あまりに野心的にプロジェクトを進めていた——どうしてこのことを数ヶ月前に気づけなかったのだろうか？

その日に連絡をして病気だと言わざるをえなかった——ほかにどんな可能性もなかったから。言うのは嫌だったよ。あらゆる作業、準備——決意を保つのはひどく難しかった。こんな状況は小学校の時以来だ。連絡し終わったとき、ずっと年をとったような気がした。悲しい？ そうでもないかな。²¹⁾

その後は少し呆然としていた。思いに沈んで、思考の道筋を失って、自分はやはりあそこにいるべきだと思った。でも、ゆっくりと自分を見つめて、また違った気持ちが出てきた——今回、高まったすべての緊張感は、外的にも内的にも、破壊的な形でしか、解消されえなかったのかも。そして、今自分がここにいて、窓越しに、雌ジカが小道を歩いて近づいてくるのを眺めていることは、正しいのだと思う。

今は、穏やかな時間が楽しみだ——静まった平和な魂がほしい——この数年、それがなかったから。だから、A [Antholoposophy] サマー・スクール（7月25～28日、8月10～25日）を楽しみにしている。音楽のコースもある。もしきみがAの活動に興味があるなら、ミンネさんの言うことには、そこ〔メキシコ〕では学校が建てられようとしていて、中心人物は R. E. ウェブスター夫妻（Corregidores 1430, Lomas Vireyes, Mexico D.F.）だそうだ。また、ヴィンクラー博士もそちらに7月20～27日に滞在し、23日には Sala Ponce で講演が予定されている。

〔……後略（自宅での様々な雑事について）……〕

〈27〉1958年2月19日 書簡 Tudor から Karlheinz Stockhausen へ 【KSD193-194】

親愛なるカールハインツへ

デイヴィッドは生きてるよ！

——そして今まできみに手紙を書かなかったことをとても悪かったと思っている——書きたいと思ったときは何度もあったのに。

きみの3オーケストラの曲が本当に演奏されることになるときいてわくわくしている。²²⁾ 僕も聴きに行けたらなあ。

ピアノ曲11番は、今、演奏する喜びをもたらしてくれている。これは病気後の初めての僕の仕事になって、今も探策中だ——3月15日には、ジョンと僕で5作品のプログラムをやるのだけれど、各曲を3回ずつ演奏する（休憩は1回！）。11番もやる予定だ。

〔……中略（ヨーロッパ滞在計画やニューヨークでのコンサート計画について）……〕

君は〔ダルムシュタットでの〕11番が退屈だったと言ったけれど、信じられない。²³⁾ あの曲は、実際の演奏の前にスコア等々について何も知られていない場であっても、いつも大きな感動を起こす。きみと僕で2台ピアノを弾くことはもう考えていない？そういう曲だったら、完全に記譜しておかないとね。

ハーバード大学でクリスチャンにゆかりのある若い作曲家たちの新しいグループができています。たぶん、この数年のあいだに新しいことが起こるだろう。僕たちは希望を抱いて生きている。

きみの新しい曲が成功するよう、心から祈っている。そして、きみとドリスに心からのあいさつを。

デイヴィッド

〈28〉〔1958年？〕9月10日 手書き書簡 Tudor（ダルムシュタット）から Mary Caroline Richards（ストーニー・ポイント）へ 【MCRP26-2】

親愛なる M.C.へ！

こちらに到着してからずっと、きみに手紙を書く時間がなかった。僕らはいつも極端のどちらかにつながれているね。とにかく毎分毎秒やることがある。あまり睡眠がとれず、ジョンは数日前に少し調子を崩した。今は僕も風邪をひいている。レクチャーは終わって、とてもうまくいった——かわいそうなジョンは翻訳をあげるために2晩まるまる起きていた。朝はときどき、ハイリゲンベルクに近づこうと山登りをした。皆はとても親切だけれど、おおかたの意見では、僕たちはちょっとクレイジーだ、ということだ。シュトックハウゼンは僕たちにとってもオープンだし、ノーノもだ。ニック、アール、キャロルもこちらにいて、それぞれ楽しんでいる。だけど彼らにとってさえ、やるべきことが多すぎる。コンサートはきわめてうまくいったけれど、最後の曲(ク

リスチャンの新作)では、聴衆がとてもうるさくて、ほとんど聴こえずじまいだった。

手紙は来ていない? ニューヨークからはこちらに何も届いていない。もしきみが何か送ってくれていて、行方不明になったかもしれないと思うようだったら、どこから手紙が来ていたか思い出してみてはくれないだろうか。そして、できるだけ早く知らせしてほしい。僕たちのスケジュールは、予定を含めて、どんどん混んできている。10月初めにはシュトックハウゼンといっしょにワルシャワへ行く。ブリュッセルの直前だ。イギリスからは返事がないので、まだ状況は浮いたまま。マースに手紙を書く時間がとれなかったが、彼が来るつもりであることを願っている——場所の確保をアレンジしているところだ。多くの連中がジョンのレクチャーを出版したがっている。庭の収穫の具合は?——取り急ぎ。

僕のをきみに

デイヴィッド

〈29〉〔1958年?〕10月2日 手書き書簡 Tudor から Mary Caroline Richards へ 【MCRP26-2】
いとしいきみへ

きみからの手紙が届いてうれしかった。1通はストックホルムで、1通は今朝ここコペンハーゲンで受け取った。バーフィールドのオープンは素晴らしいじゃないか。ハーブを乾燥させたり飾りにしたりするのを考えるのはとても楽しい——ここではほぼできないことだから、そんなことがとても恋しい。〔……中略（ストーニー・ポイントの近況へのコメントなど）……〕だいたいにおいて、スカンジナビアは滞在するのに最も快適なところの一つのように思える。マースとキャロルはストックホルムのオペラ座で日曜日に踊る予定だ——このアレンジはとてうまくいった。ただ、傾斜のあるステージに慣れる必要があり——まるで丘を上ったり降りたりだ——とても危険。マースはキャロルといっしょにニルソンの曲で新作《夜の放浪》を作っている（彼の言うことには《夜のデコボコ》）。場所がなかなか見つけられなくて、二人とも朝の8時からリハーサルをしている。僕たちのコンサートも似たような状況だと想像できるだろうね。こちらではかなりよく受けとめてもらえて、《易の音楽》についてとてもよい評が2つ出た。ヨーロッパ大陸では論争がまだ荒れ狂っていて、ピエールにまで広がっているようだ。この先のことはまだ確定していないが、10月14日にはデュッセルドルフにいるから (c/o J. P. Wilhelm, galerie 22, Kaiserstr. 22)、手紙を書いてくれるならそこに送ってほしい。途中で、つまりブリュッセルのあと、たぶんケルンに戻る——退屈だが節約にはなる、これがとにかく必要だ。マースとキャロルがどうやってやりくりしているかはわからない。彼らの出演料はすごく安い。きみが言葉の想像世界へと分け入っていると思うと楽しい。言語のことを考えるなら、すべては音から発していることを忘れないで。『視覚的言語としてのオイリュトミー』を調べてみるといい——言葉を錬金術的に知覚すること、これは詩にとって大事で、きわめて有益だと思う。この本は2階でみつけられると思う。

ラブ、ラブ、ラブ

デイヴィッド

〈30〉1958年10月20日 手書き書簡 Tudor（ロンドン）から Mary Caroline Richards（ストーニー・ポイント）へ 【MCRP26-2】

いとしい mc へ

僕たちは今ロンドンにいて、オックスフォードに向けて発とうというところだ。オックスフォードでは現代音楽クラブからトークを頼まれている。僕たちはマノラマ・サラバイの家に滞在しているから、すぐにインド料理のランチが食べられる。昨日、僕たちはアッティンガムにいたが、あまり気乗りはしなかった——イギリス人たちはおそろしく堅苦しいところがある——でもそれにもかかわらず、僕たちは彼らにより印象を残したと思う。コーブランドがいて、彼の曲を弾くはずだったピアニストが病気で、それで僕がケージ等でプログラムの埋め合わせをした。まあ想像してくれ。でも、デュッセルドルフはすてきなコンサートだった。コーネリウス・カーデューというイギリスの才能ある若い作曲家が、僕らといっしょに《ミュージック・ウォーク》を演奏した——1台のピアノの3人のピアニスト、部屋のまわりに4台のラジオ。とても愉快だった。そのあと、たぶんもう会うことのない友人たちと、たくさんのさよならをした。カーゲルはすばらしいやつでアルゼンチンの作曲家なんだが、彼のお気に入りの品（カラバッシュとスプーン）を僕にくれた。彼はそれを何年ももっていたそうだ——すごく胸をうつ贈り物だ。オックスフォードのあとはロンドンに1日戻って、ジョンの友人を訪ねてブリュッセルへ発ち、それからハンブルクへ行く。そのあと僕はゆるゆるグラスゴーへの道を取り、そこを11月1日に離れ、そして2日、朝8:30に帰国する！　うれしいなあ！　この路線は便が多くないので飛行機が混んでいて、それでもっと早い日の便がとれなかった。ロンドンでは踊るチャンスもあったかもしれないのだが、結構なものではなかっただろう。ジョンは僕に、シュトックハウゼン家に泊まったときのことをきみに書いたと言っていた。でも僕は、その小さな家に彼らと僕たちがずっと一緒にいたらもっとよかったと思っている。結局、彼らは僕たちといるのが好きなようだ。ジョンは自分がどのように帰国するかわかっていない。たぶんボートで帰るのかな。ドイツのあちこちで騒いでいるマースとは、ブリュッセルで会う予定だ。おっと、もう走っていかなくては。

たくさんの愛を

デイヴィッド

〈31〉1959年5月1日 書簡 Tudor から Karlheinz Stockhausen へ 【KSD234-235】

親愛なるカールハイツ

まず、こんな長いこと何も知らせずにいたことを許してほしい。どうか不誠実だと思わないでくれ。何度もきみの仕事のことを考えて手紙を書きたいと思ったけれど、机に座る暇もなく一日

一日が過ぎ、何週間も過ぎてしまった。僕にとってこのシーズンは、ちょうどきみがヨーロッパで見たのと同じような具合だった——リハーサル、演奏、新しいことの準備、それ以外のことはもうほとんどできない状態だ。今年僕が自分で計画したプロジェクトのうち、どれ一つとして達成できていない！そしてこの状況はまさに夏に入るまで続くだろう——1月にすでに、こんなことになるだろうとわかっていたから、再び行くことにはかなり抵抗した（分かってくれるだろうけれど、単に契約書を書く時間もとれないから）。きみからのこの前の手紙で、行くことを決心した。きみの頼みを断るのはなかなかできないし、きみの提案はともうまくいきそうだったから。（ここでも再び、許してほしい。腰をおちつけて手紙を書く時間がなかったなら、電報を送るべきだった。）

そういうわけで、今回は金銭的には、すでに提示されている契約に完全に頼ることになる——ダルムシュタット、ベルリン、ブルーノの曲。また、もっと活動するために、もう少し長く滞在してもかまわない——たとえば少なくとも11月末まで。僕が一番気をつけているのは、まず第一に、準備する曲を多くかかえすぎないこと、また第二には、いくつかの曲をできるだけ多くの場所でとりあげたいということだ。例えば、ケルンのラジオ局は次の曲でのコンサートに興味があるだろうか？きみの新作（ベルリンのための）、ブルーノ作品、カーゲル作品、ジョンの曲のどれか（2～3人の「献呈」音楽家たちによる《コンチェルト》の縮小版——もし《コンチェルト》がタブーなら、他のものでも可能）、その他の作品（ブソッティ、カーゲル？）。そして、このコンサートでのツアーをアレンジする？——これがこのごろの僕の考え方だ——とはいっても、きみはわかっていると思うけれど、小さめのコンサートだったら、いくつあってもかまわない！

音楽学校のことについては、仲介してくれるきみの友情のとても感謝している！²⁴⁾率直に言って、そんな長期間のことについて約束することは気が進まない。でも、僕の気持ちがこの件についてまったく向いていないわけではない。現状では、他の望ましい目的を可能にする手段になる場合に限っては、この種の提案を受け入れることができるだろう（僕が明らかな設計図を描けるような「目的」）。言い換えると、もっと多くの可能性や計画が抱き合わせになって、僕のなかで明白な決意が形成されるような条件が準備されるなら、ということだ——自分がある場所に「根付く」感じがするという問題ではなく、方向性が明確でなければならない、ということ。これを全面的に考慮してもなお、シュレーターがその気があるのなら、夏期に行くことを検討してもよい（たとえば、1960年？）——でも、きみもわかるだろうが、これ以上のコメントはまだ「星空」のかなただ。

〔……中略（ニューヨークでの《ピアノ曲》の録音および《グルッペン》の演奏計画について、ダルムシュタットでの曲目について）……〕

ジョンはひどく疲れてぼろぼろになって帰ってきた。ケルンできみに会いに行かなかったのはそのせいだ。その後もあれこれですっと忙しいままだ——ジョンのレコードがもうじき発売されるし、また、ジョンの以前の学生を含む若者たちのグループが、多数のコンサートを開いている。

でも、人々は過去の作品ばかりを（古くは《易の音楽》に始まって）聴きたがるので、僕たちの新しいプランはまだ実現しないままだ。新しい状況あり——フィリップスのパヴィリオンからのマックスフィールドの電子作品とヴァレーズの曲〔《ポエム・エレクトロニク》〕のコンサート——やっかいなことにヴァレーズのテープの一部が事故で消えていたのだが、このことは演奏の瞬間まで気づかれなかった。この問題について彼が短いスピーチをした。機械はいかに非人間的であるかとよく言われるが、しかしながら、いかに気まぐれでもあるか、と！ たしかに。でも、いったい誰がテープをスピーカーのすぐ横なんかにはったらかしておくだろうか？

ケルンの友人たちに心からの挨拶を伝えてほしい——カーデュー、カーゲル、ヘルムス、トメク、アイメルト、そして奥さん方に。

そしてきみとドリスに愛を——そしてスヤ、クリスタル、マルクスに。機会があったら手紙を書いて、きみの計画を知らせてほしい。

デイヴィッド

〈32〉〔1959年〕9月7日 タイプ打ち書簡 Tudor（ケルン）から Mary Caroline Richards（ストーニー・ポイント）へ 【MCRP26-2】

M！C！へ

手紙をありがとう——今まで忙しくて忙しくて忙しくて、手紙を書く時間がまったくなかった。この3週間ほとんど休みなくたいへんな量の仕事をこなし、その結果、熱が出て、それでもベッドに行くことが不可能だったから、4日間もひきずってしまった。最終日には、講習会のあいだに学生たちが作曲した作品でコンサートをしたのだが、スコアがその日の朝にもまだ届けられて、すぐにリハーサルをしなければならなかった。今やっとすべてが終わった。どうだったかは神のみぞ知る。

興味深いセッションがおこなわれた。カールハインツが主に図形楽譜に絞ったクラスを開き、それから、一連のレクチャーをおこなって、そのなかで図形楽譜的な傾向のある新しい作品のスコアについて説明し、提示した（ときには演奏を交えて）。ごく客観的に、分析なし（ケージ、ブソッティ、カーデュー、シュトックハウゼン、カーゲル）、またいかなる批評もなしで。きみは想像できるだろうけど、皆にとってもよく理解されたわけではなかった、彼らは何か意見を好むから。ノーノがやって来て話したのだけれど、かなり病的な感じで、新しいすべてのこと、若い作曲家とくにジョンの試みすべてを、公然と非難した。拍手、ヤジ、等々。同時に、正しい道にある唯一の作曲家としてアールを支持して、彼の作品は2回演奏した。ノーノが述べた前提とすべてと明らかに矛盾していたのだけれど。とても陰湿な雰囲気。大方は派閥の問題、記者たちには大収穫になっただろう。

〔……後略（この後の予定について、ダルムシュタットの食事について、ハーブについて）……〕

〈33〉〔1959年〕10月8日 タイプ打ち書簡 Tudor から John Cage へ 【JCC2-13-7】

親愛なるジョンへ

やっと手紙を書く時間がとれる。

ベルリンから戻ってきたところ。完璧にすばらしい街、とても生き生きしている——ここで僕たちはオール・シュトックハウゼンの夕べをやって、とてもよく受け入れられた。ヴィヴラホン、チェレスタ、ピアノのための新作（《リフレイン》）あり。〔……中略（11月のコンサート計画について）……〕

僕は12月早くに戻ろうと思う。マースがその頃契約をすると言っていたから——彼が僕に知らせてくれるといいのだが。みんながすでに、きみと僕がいつヨーロッパに戻ってくるのか、と尋ねている。春だったら可能かもしれないと答えている。ピエールは僕に3月29日パリに来てほしがっている（ブソッティ）。もしきみが来たいなら、3月か4月のために、ことを動かすことを試みようと思う。もしきみにその気がないなら、僕も来たくない（正直言って、休養がほしい）。ポーランドが僕たちが来ることにとても興味をもっているの、いくつかの都市でいくつか契約をとることができるだろうと思う（彼らはプリペアード・ピアノに惹かれている）。カーゲルがコンサートを計画しているから、そこで僕たちを使うかもしれない。だけど、きみがむしろ秋のほうがいいなら、教えてほしい。ダルムシュタットはあいかわらず骨が折れるが、他にも開かれた扉はたくさんある——ブレーメン、デュッセルドルフ、シュトゥットガルト、ミュンヘン、ヘルシンキ、ブリュッセル、ウィーン、アンカラ（！）等々。僕が思うに、ブルーノが、自分のコンチェルトときみのプリペアード・ピアノのコンチェルトによるプログラムに興味をもっているようだ。

《フォンタナ・ミックス》はダルムシュタットで大成功だった。キャシー〔・バーベリアン〕はまったく信じ難いほどすばらしく（紫の装い）、堂々として楽しませてくれた。これはノーノの反乱があったにもかかわらず、だ。それがカールハインツに対抗してしくまれたことは誰もがわかっていた。大挙していた批評家たちを除いては。Kはとても活動的で、新しい図形的潮流についてレクチャーと作曲クラスを開き（自作、きみの作品、カーゲル、カーデュー、ブソッティ、ブーレーズ、ブラウン）、それからその成果として曲を書き、それらをセヴェリーノ、カスケル、自身で演奏していた。その側でノーノは影にひそみ、乱暴な言葉ですべてを奪取しようともくろんだ。彼が言ったことはほとんどは匿名になっていたけれど、彼はきみの名前（とシリンガーの名前）を「象徴」のように使った。それはまったくあからさまで、遺憾かつ不愉快だった。たとえばこうだ。「皆さんおわかりのように、このフルートとピアノのための作品は、ガッゼローニとチューダーによって演奏されることを望んで、キノコのように生えてきています。紙のうえで破綻するほかないのは明らかなのですが、この芸術家たちはどうにかしてすごいものにしようとしているのです」等々、またもっとひどいことも。²⁵⁾ かなり病的だ。次の晩、彼はカールハインツのところにやって来た。「カールハインツが怒っていると聞いたが、なぜか理解できない」か

らと言って。

〔……中略（ダルムシュタットで出会った人々について）……〕

カーゲルの作った、ピアニストと打楽器奏者とテープのための曲はとてもすてきだ（ただし、テープのパートは全体的に冗長で、不成功）。ピアノの横では、打楽器奏者があらゆる種類のバチをもって、美しい動きをする（黒鍵のダンパーはすべて白でマークされて、確実に弦を打てるようになっている）。ピアニストには多数の手のこんだスライドするトーン・クラスター（弱音で）。音はとても密で、かなり「子音的」で、過剰なほどに豊か。もし、きみが乗り気なら、僕たちでこの曲をやってみてもよいかもしれない（でも、とんでもなく複雑ではないかと心配だが）。〔……後略（今後のコンサートの計画について）……〕

〔34〕〔1959年〕11月4日 タイプ打ち書簡 Tudor（ケルン）から Mary Caroline Richards（ストーニー・ポイント） 【MCRP26-2】

最愛のきみへ

きみの手紙を読むのはすてきだ。きみのことが恋しくて、きみが僕といっしょにいてくれたらなああとほんとうに思う（でも、それが実現できないことは天が知っているね——僕は昼も夜も仕事ばかりなんだから）。とにかく僕が恋しいのはほんとうにきみのことだ——ホームというのはほとんど意味をもたない曖昧な言葉で、僕はずっとホームのない魂だったが（そういう魂たちの一つ）、でも今は、ほんとうにホームということがわかる。

長いこと連絡しなかったことを許してほしい。リハーサル、楽譜書き、編曲などにずっと包囲されていた。自分自身の問題についてはずっと遅れをとっているの、僕は自分自身に追いつけるよう急がないといけなと感じている（ジョンのように）。

ときにはいい時もある。素晴らしい時を過ごしたベルリンでのように。でもまさに車輪のように動きつづけている。だから、ケルンに戻った時、すぐにドルナッハに行きたかったのだけれど、録音のためにパリに行かねばならなかった。はじめてパリを楽しめた（でも、たぶんそれは、2日間しか滞在せず、そしてたくさん稼いだからだろう——報酬を3倍にさせた）。きみに、ラ・ヒュンからちょっとしたものを送ったけれど、受け取っただろうか？

ドルナッハから手紙を書くつもりだったけれど、眠る時間さえなかった。あまりに見るもの、することが多くて。それから、ハイキングに熱中してしまって、最初の数日間やりすぎた。上ったり下ったり、前進したり後戻りしたりが楽しくて！ 僕の訪問を正確に予告することは難しかったが、いずれにしてもこれが可能な唯一の時だった。でも、僕の滞在中ずっと、2つのオイリュトミー団はツアー中で、やっと最後の日に一部が帰ってきたので、行く前もまた今も望んでいるようなコンタクトはまったくできなかった。僕は人々のために3回演奏したが、新しい音楽にかなり関心をもったようだった。そこはほんとうに美しい場所で、僕が泊まっていた小さな家は、ちょっと小高くなった森の端にあった。毎日、小さい青い鳥が訪ねてきて、何か食べ物がないか

僕の部屋のまわりを回っていた。「人類の代表者」を伴うシュタイナーの彫刻群には、最も強力かつ直接的に、感銘を受けた。それはその周囲の空間を支配していて、物質的な意味での客体とは正反対のものであるという感情をもたらす。おそろしく生氣をもっている。僕はもっと見たかったのだからできなかったの、また行きたい、いつか君といっしょに。ドルナッハで僕は、「ホーム」だという強い感情をもった（そこに住まなくとも）。

〔……中略（今後のコンサートの計画について）……〕

きみがコースをとっているときいてとてもうれしい。Kari Van Oordt はすばらしいオイリュトミストで、最高の先生だと思う。

僕のすべての愛を、いとしい人

デイヴィッド

（解説）

アントナン・アルトーへの言及が〈7〉に見られる。リチャーズはアルトーの『演劇とその分身』（原書は1938年パリで出版）の英訳を1958年に出版しているが、アルトーに関心をもったのはチューダーを介してであったと述べている。²⁶⁾ これ以外にも、アルトーの名前は、二人の書簡のなかで、ときおり登場する。²⁷⁾ また、リチャーズとの話題のなかで目をひくものの一つに、シュタイナー思想（シュタイナー学校、オイリュトミーを含む）があり、〈26〉〈29〉〈34〉は明らかな言及が見られる。リチャーズ自身も1959年10月8日のチューダー宛の書簡【DTP58-9】で、「火曜日に、ニューヨークのシュタイナー学校の教師養成プログラムに通いはじめました。絵画クラスと、オイリュトミーと、エッグ氏の「人間とは何か」についてのレクチャーをとりました。」と書き送っている。〈26〉で語られている1957年の精神的危機と、シュタイナー思想への接近とのあいだに関係があるのかどうかは、この資料からだけでは判断しがたいが、チューダーにとってどちらも非常に重要な問題であったことは確かと言えるだろう。なお、チューダーは占星術やその他の神秘思想にも強い関心を示しており、これらの複数の領域の間に境界線をはっきりとひくことは難しいかもしれない。なお、〈6〉〈9〉〈15〉〈16〉〈17〉〈18〉では食事に関する話題。チューダーの素顔が見えるようで楽しい。〈18〉のダルムシュタットの食事に関する不満などはなかなか切実である。

一方、シュトックハウゼン宛の書簡からは、最初の出会いからすぐに、互いに強い信頼感で結ばれた様子が伺える。作曲家と対等に意見交換し共同作業するチューダーの姿が浮かびあがる。〈13〉ではかつて傾倒していたステファン・ヴォルペに対して批判的な発言をしている点は興味深い。ただし、若者同士の盛り上がりゆえに、多少、過度に勢いづいた発言になっている感もある。1960年代の書簡〈42〉では、ヴォルペからの演奏のリクエストに応えようとしているし、また晩年にはヴォルペの楽譜の校訂作業も行っているの、決定的な決裂のような事態ではないと思われる。また、〈30〉では、人々がケージの過去の作品に関心を示すことにいらだちを示して

おり、常に新しいものへと目を向けていく態度のしるしと読むこともできるだろう。〈23〉では、ケージとブーレーズのちょっとした論争を紹介しており、「音高」よりも「音価」つまり時間を重視するケージおよびチューダーの態度が興味深い。

また、コンサートのプランニングに関する少しフォーマルなものもある。〈11〉〈12〉は自分からの曲目等の提案だが、いわゆるクラシック音楽の範疇にはいる音楽が自分の仕事ではないことをはっきりと告げ、同時代の音楽と「時間概念」が異なると言っている点は重要である。また、〈19〉〈21〉はアンリ・プッスールの作品、〈20〉〈22〉はジャン・バラケの作品に関するもので、演奏したものの満足できずにとりさげたり、まったくキャンセルしている例である。理由を理路整然と述べる態度には、演奏者のプライドも感じられる。

〈25〉〈26〉は急病のためダルムシュタット等、ヨーロッパの予定をキャンセルしたときの心情が述べられている。〈31〉〈32〉は、ダルムシュタットでのシュトックハウゼンとノーノの論争事件のレポート。注25に示したケージのとぼけた切り返しが面白い。

3) 1960年代初期——シアターピースへ

チューダーの活動の概要

1960年にニューヨークのリヴィング・シアターでリサイタルを開く。また、1959年ごろから、レパートリーにフルクサス的な作品が見られるようになる。1961年は4回目（そして最後の）ダルムシュタット参加。1962年にはケージとともに初来日を果たす。本稿で訳出した書簡はここまですになるが、これ以降は次第に作曲家としての活動へ向かい、1966年にはEAT主催の「9イブニングズ」において、『バンドネオン!』を発表し、電子音楽作家としての大きな一歩を踏み出す。その後、1967年以降は、主にサンフランシスコに滞在し、ポーリン・オリヴェロスらとの交流を深める。1968年には、マース・カニングハム舞踏団のために『レインフォレスト』を作曲。1969年には、翌年の大阪万博のペプシ館のための音響設計の責任者をつとめることになる。

書 簡

〈35〉1960年2月8日 タイプ打ち書簡控え? Tudor から Wolfgang Steinecke へ 【DTP15-2】

親愛なるシュタイネッケ博士へ

お返事がこのようにたいへん遅くなったことを、どうかお許しいただけますように。これは、カニングハムからのはっきりした言葉を待っていたためです。

カニングハム氏から今聞いたところですが、彼が12月以降交渉を続けてきたいいくつかの案件があり、それらを引き受けざるを得ないと考えています。そのため彼は8月半ばまで多忙となり、したがって、あなたからのダルムシュタットの提案をお引き受けすることができません。しかし、

あなたが関心を示してくれたことに対して、彼が心から感謝しておりますし、別の機会がもてたらと望んでいます。

このため、私は今年は講習会に行くのは控えたいと思います。この数年、ほんとうの休暇というものがまったくなく、今年の7月は私が休みをとれる唯一の機会なのです。もしカニングハムと一緒に出演する機会があったなら、この休みをとるという考えをあきらめたいと思います。彼の作品がヨーロッパで知られることは最も重要なことだと考えているからです。また、あなたもご存知のように、私が最も関心をもっていることは、ここアメリカの芸術生活とヨーロッパの芸術生活のあいだの真の交流の可能性だからです。

親切なご提案に対して、そして、カニングハムに関してあなたが今までしてくださった仕事に対して、心からの感謝を述べさせてください。彼がもうすこし遅い時期に、つまり8月と9月に行けるようになることを願っています。

あなたのお仕事とダルムシュタットが成功しますように。 敬具

〈36〉〔1960年6月?〕 手書き書簡 Tudor から Mary Caroline Richards へ 【MCRP26-1】

いとしいMCへ

コンサートはあともう一つ——火曜日にはベルリンへ行き、数日滞在し、ケルン経由で戻って、たぶんドルナッハに立寄り、最終的にはヴェニスへ。そこですこしのあいだアミのところに滞在して、演奏する環境などを調べる。ヴェニスにいつ到着するかは未確定だが、たぶん7月8日までに着いて、14日まで滞在するだろう——そのあとすぐ家に帰れるかもしれない——まだわからないけれど。26日まではケルンで連絡がとれる。その後はヴェニスに連絡してくれるのがいいと思う (c/o Frank Amey, Palazzo Contarini-Corfin, Accademia 1057)。

かわいいカードをありがとう——きみのことをたくさん考えていて、きみがいっしょにいたかなあと思う——ヴェニスに来ることを考えまない? アミのところにはきみが泊まれる部屋があると思う。

ここでのたいていのコンサートはひどくしかめつらしいので、水曜の夜に、僕は「アンチ・コンサート」をした。²⁸⁾ ジョージ・ブレクトとラ・モンテ・ヤングの作品でね。詩と声とラジオのための作品、キャンドルつき。そこはライン河をのぞむ小さなギャラリーで、その大きな窓にキャンドルの光や、僕が空中にまきちらしたカードが映りこんでいた。とても素晴らしい雰囲気だった。関心もあたたさかも十分。

きみのもとに走っていきたい

きみが何をしているか知らせてほしい

愛している

デイヴィッド

〈37〉〔1960年〕8月12/13日 手書き書簡 Tudor（ドルナッハ）から Mary Caroline Richards（ストーニー・ポイント）へ 【MCRP26-2】

最愛のきみへ

手紙を書くことができた時から、ずいぶんとたってしまったようだ——ヴェニスでは少し休息がとれるかと思っていたのだけれど、結局、いつものようにいろんな人に会いまくっている。仕事を片づけるために。ジョンに手紙を出したら、その数時間後に彼からの手紙が届いた——コネチカットに行くそうだ〔……中略（これからヴェニスへ来るケージへの連絡の依頼など）……〕

ヴェニスではあらゆる種類のトラブルが起こっている。きみももう聞いていると思うけれど、今月末に始まるはずだったコンサートは行われなくなることになり、初回は9月18日の予定だ——おそらく、ダンス・コンサートが一つビエンナーレでだめになる。ヴェニスに関しては、どうもこの種のことで参ってしまう（つまり、僕らの悪友たちは予定通りにやって来ないらしい）。だから、今回はきみは来ないほうがいいかもしれない。きみのことはすごくすごく恋しいよ。でも、むしろ何かお祭り気分の機会のほうがよさそうに思うし、二人だけで旅行をしてもいいね（たとえばドルナッハとかイギリス）。もう1年待てないかな？ たとえば、もしチリのことがうまくいって、十分お金があって、「蓄え」からもすこし補充すれば、きみも行けるだろう——サンティアゴに1ヶ月、それからアルゼンチンとたぶんパルーで時間があるだろう。あるいは別のツアーの可能性もある。5月末からのユーゴスラビア。待って見ないか？

サンフランシスコでのきみの文学の業績のことを書いて、わくわくした。ニューヨークでの引越はもう終わった？

結局、お金の心配はあったけれど、ドルナッハに来ることに決めた。でも、ここのイベントに完全には満足してない。レクチャーはもっと充実させられるのではないかと思った（ドイツ語だとしても）。たぶん、「大いなる個」というテーマのせいだろう。扱いにくいものだ。それから、数多くのコンサートもあったけれど、かなりひどい質だった、悪いけれど。それでも、劇場の公演は素晴らしかった。でも、メインのオイリュトミーの公演はこれからだ。²⁹⁾〔……中略（今後の予定について）……〕

ダイアンとラ・モンテと、きみとの会合には興味をそそられた。僕も西海岸から楽譜を一山入手した——面白いものが若干ある。彼らは東洋に何かするべきことを見つかるのだろうかとかあれこれ考えている。

この夏に演奏しようと、新しい楽器を習得しようとがんばっている。³⁰⁾でも、うまくいくかどうかはわからない。ひどくむずかしい。

僕は今、漠然とだが、奇妙な気分にある——それを完全に外面に開くことは難しいとわかっているのだが、内面で深く受け取れてもいない。一ヶ月かそれくらいのあいだ、一人になりたいように感じている（あるいは、家にいたい）。思うに、本当のところは、最近数ヶ月の自分の活動や、ごく近い将来の視野にはいつている活動のどれについても、ほんとうに満足していないのだ。

〔……中略（二人での旅行可能性について）……〕

こっちに来ることにに関して、きみが一番いいと思っていることを知らせてほしい。もし来る場合には、いつまでに帰らなければいけないか、なども。ベルリンのあと、僕たちはミュンヘンとストックホルムへ行くことになると思う。

ラブ、ラブ、ラブ、最愛の人

デイヴィッド

〈38〉〔1960年〕8月26—29日 手書き書簡 Tudor から Mary Caroline Richards へ 【MCRP 26-1】

いとしいきみへ

はい、きみが送ってくれたものすべてと、宝物すべてを受け取った。きみがここに現実にはいない今、きみの言葉は僕には輝く泉のようだ。僕は困難な時期から抜け出しはじめた。すべてが外面的に無意味で活力のないものに思えていて、うつ状態のようだった（何年もこの状態には陥らなかったのだけれど）。家から、そしてきみから、強制的に引き離されていたのは堪え難くて、また、時々、まるで自分の目の前に遮蔽物が立っているかのように感じ、生き生きした感覚体験が妨げられていた。同時に僕は、自分のよりよい自我が、ぼんやりとはしていてもそこに確かにあることもわかっていて。今になってやっと、深い内的問題が照らし出されている。1年間ずっと、僕は、なんの進歩もできず、倫理が自分のなかに浸透するまでになっていないことに気づいていた。方向を示すような非常に強い体験もいくつかあった。でも、それを浸透させることはできなかった。それで、自分がひどく嫌になったのだ。結局、問題はエーテルの性質と関係があるに違いないということが僕のなかに降りてきた。エーテルは道徳的であって、またどの方向においても境域においてはいや応なしに痛みが生じる。³¹⁾ 今、自分の目に映るものを通して「見る」ことを学べさえしたら（僕が今認識しているのは、単に僕自身の内面の弱さの反映だけだ）、これを人生の体験として保つことができるだろうし、そして、物事をそれら自身の本質で照らされた状態で見ることができるだろう（子供のときに見るように）。僕は音に関してはこの能力を失ったことはない。だけど、もちろん、人はただ音を聴く者であるだけではない。以前なら仏教がこういった困難に啓蒙を与えることができたのかもしれないが、いったいどのようにして、明白にならねばならないことを隠しながら、仏教がその最も不透明で密度の高い形にある西洋を吹き払うことができるのか、不思議じゃないか？

〔……後略（ヴェニスでの近況について、今後の予定について）……〕

〈39〉〔1961年〕5月1日 ペン書き書簡控え？ Tudor から Wolfgang Steinecke へ 【DTP15-2】

親愛なるシュタイネッケ博士へ

今年はダルムシュタットへ行くことを、まずはお知らせいたします。また、あなたのご提案に賛成です。一つだけ問題があります。今回8月19日という早い時期に開始されることを知りませんでしたので、ニューヨークでの仕事が20日まであります。22日にはダルムシュタットに到着できると思います。これであなたのお役にたてるでしょうか？ 明日、シュトックハウゼンと会いますので、このことについて彼と話をします。

プログラムについては2点あります。

1) もし間に合うように完成されるならば、《ピアノ曲9番》(11番ではなく)を演奏したいと思います——これについては初演になるのではないのでしょうか(プレーメンでは初演されない予定です)³²⁾

2) 一柳などを希望されていますが、この夏と秋のあいだ、すばらしい日本人のヴァイオリニストがヨーロッパに滞在する予定です。彼とはニューヨークで一緒に演奏したことがあります。なによりまず、ダルムシュタットでは彼とのプログラムを提供したいと思います。

共演曲目：《34'46.776"》ピアニストと弦楽器奏者のための ジョン・ケージ

《スタンザ》《ピアノのための音楽7番》(同時演奏) 一柳慧

《封筒》 テリー・ライリー

加えて、ラ・モンテ・ヤングやリチャード・マックスフィールドの作品も演奏できます。プレクトの曲をするには、小アンサンブル、7～8人が必要になります。もしあなたが望まれるならやりましょう。これらの曲のタイトルについては、後日お知らせします。マックスフィールドの作品はすべてテープを含んでいて、たしか3台の機械が必要です。

ヴァイオリニストの名前は小林健次です。6月1日まで次の住所で連絡がとれます(c/o S. Goldberg, 752 Keizersgracht, Amsterdam C.)

7月1日までは私はヨーロッパにいる予定ですが、アドレスは決まっていません。シュトックハウゼン気付で私に手紙を送っていただくのが最良でしょう。どんな手紙もそこから私に転送してもらえます。

敬具

デイヴィッド・チューダー

〈40〉1961年9月15日 手書き書簡 Tudor (リオデジャネイロ) から Mary Caroline Richards (ストーニー・ポイント) 【MCRP26-1】

いとしいMCへ

楽譜と手紙をありがとう。

本のことはどうなった？ それから、きみの庭の様子は？

[……中略(連絡先について)……]

今年はダルムシュタットを多少は楽しめた。コンサートの数が少なくて、心配ごとが少なかったから。でも、いつもどおりまだ疲れる。僕のクラスは全員がとても楽しんでくれた。もちろん僕も。たくさんの人が積極的に参加してくれたから。

それから、ケンジとのコンサートも大きな成功だった。とても生き生きとした反応があった。他のコンサートとは大きく違って。シュタイネッケさえ認めていた。彼がこの方向性を続けてくれたらと思う。ジョージ・プレクトの曲（《付随音楽》）とラ・モンテの曲は印象的だった。結局、ラ・モンテはヨーロッパの作曲家なんだと僕に思わせた。

〔……中略（小切手について）……〕

ストックブリッジの学会についてもっと話を聞きたい。きみが、自分の時間を無駄にしていると感じることのないようにと願っている。僕は何度も似たような難しい決意をしてきたけれど、ようやく、大事なものは人とのコンタクトだと感じるようになった。焦点がしぼられると、なおさらだ。人は自分の歌を歌いたがるというのは真実だけれど、でも、彼らも努力をしてそうなるだけだ。そして、理解すべきことがあまりに多いところでは、人はお互いに助け合うしかない。

〔……後略（今後の予定について）……〕

〈41〉〔1961年〕10月30日 手書き書簡 Tudor から John Cage へ 【JCC2-13-7】

親愛なるジョンへ

いちばん新しい戦利品。

〔ハンス・〕オッテといっしょだった、というのも、きみにも彼から言ってきたように、5月初旬にきみの作品のようなシアター型のものをしたいと考えているからだ。だけど、きみや僕がいらないなら、シアターピースを上演したくないと思っていて、さらには、きみの作品がないなら、そのプログラムをあきらめようとさえしている。（彼は、きみがシアターピースすべてのパパだと感じているよ。）

可能性として、マウロ〔マウリシオ・カーゲル〕の作品——2台ピアノ、打楽器アシスタント、それから俳優が1人か2人。短いベケット（オッテが知らない作曲家による音楽つき——おそらく若干のその他の楽器が含まれる——僕はシルヴァーノ〔・ブソッティ〕を示唆しておいた）。カールハインツの習作2、ダンスつき。そして、彼はケージをご希望で、僕たちが日本への道中にプレーメンに立ち寄れるかどうか知りたがっている。

彼はシアターピースを誰に任せたらいいのかわかっていない（当然のことだ。今わかりつつあるのは、ドイツ人のシアターの観念が岩のように重いということ、それから、役者たちを避けるべきであること。）僕のダルムシュタットのクラスにいて、素晴らしい仕事をした二人の仲間——ローズとフォン・ビール——をそれとなく提案しておいた。それから、シュヴェルツィクとカーデューも。しかし、オッテがこの提案にそって動くかどうかはわからない——たぶん、状況によるだろう。

ヨーロッパの対極の、ものすごい寒さのところに到着したところだ。交渉ごとは安心できない。リオでのピアノについては、ステージに載せるアンプが確保できなかったので、『ウィンター・ミュージック』はアンリ〔・プッスール〕にコントロール盤をまかせた——とんでもなくすばらしかった。あちらこちらでゴロゴロいうし、突然音が出たり出なかったり——すばらしいオーディオ装置。僕がアンリ用にスコアを作ったけれど、彼はそれを必要とせず、すごく楽しんでいった。リオはすばらしいけれど、群衆のなかは雰囲気が悪い（ちょっとナポリと似ている）——バイアはより楽しめた。非常に美しいところで、とても暖かく受け入れられたし、また来てくれと言われた（きみとマースも——ただし、彼らはアメリカからの旅費を払うことができない）。

トシ〔一柳〕からの最新の知らせ（4週間前）では、きみと僕は「ほとんど確実に」来年の春、「ひょっとしたら5月」に日本から招いてもらえるとのことだ。

何かほかのことを聞いている？

カールハインツのシアターはそれほど面白くない——僕が思うに、彼はいまだに、自分は他人よりもずっと興味深いやり方で聴いたり見たりしていると思っているのだろう（だから、誰も自由ではないのだ。たとえ彼が、自分の作品（つまりある構成物）において、人々に「単にいつもしていること」を行わせたと思っているとしても。）（メモ：いかにしてきみは、きみがいつも行っていることを行うことができるだろう、もしきみが誰か他人の感覚器官をもつとしたら。）

僕の態度が冷たいと思うかもしれない。もう休みをとらずにはいられない、そうでなければ、旅にうんざりして疲れきってしまう。ここには11月8日までいて、それからスペインとポルトガルへ（mcが11月12～15日のアドレスを持っている）。それからおそらく11月29～30日にミュンヘンへ行くと思うが、マースの希望を聞けるのを待っている。指示がない場合には、12月2日に帰国。

きみの調子はどう？ 本や新しい曲はどんなぐあい？ ニューヨークで上演する？

オッテとケルンの皆からよろしく言われた。

デイヴィッド

〈42〉〔1962年〕10月25日 手書き書簡 Tudor から Mary Caroline Richards へ 【MCRP26-2】
いとしい mc へ

きみのニュースを聞けてとてもうれしい。メモも残さず、鍵を置いていくのを忘れて、飛び出してしまって申し訳ない。鍵はスタジオのクローゼットの中の釘にかかっている。電話とは逆側のほう。新しい扉をどう思う？——ガラス板が壊れたので、僕が直した——サリが手伝ってくれて。ところで、サリが帰る前の晩、彼女のために何かを持ち帰ってほしいと頼まれたのだけれど、それが何だったかきれいさっぱり忘れてしまった——聞いて、すぐに知らせてくれるかな？ それから、至急のことで助けてくれないだろうか？ ステファン〔・ヴォルペ〕が、僕が3月17日か4月7日に彼の3台ピアノの曲を弾けるかどうか、すぐに知りたがっている。マースに電話を

して、これらの日にちは僕がフリーかどうか聞いてもらえないだろうか——もしできそうなら、心づもりとしては僕はニューヨークに少なくとも1週間前には戻らないといけない——たくさんのリハーサルが必要だろうから。そのあと、ステファンに電話をして、彼に結果を知らせてほしい（もしどちらの日もだめな場合でも——ひょっとすると彼は日を変えるかもしれない）。いずれにしても、できるだけ弾きたいと思っている。彼によろしくと伝えてほしい、ヒルダにも。それから、ステファンに、僕は早くて12月に帰るので、リハーサルの場所をもうアレンジしておいてかまわないと伝えてくれ。

〔……中略（日本公演後の予定）……〕

僕たちはとてつもないフル回転だ——あまりに多くのやること見ることがありすぎて、したいこと全部に時間を見つけることはまったくできない。日本の人々は僕たちをすばらしくもてなしてくれているし、また、そのことは彼らにとってもとても楽しいようだ。ここではすべてのことが特別にアレンジされることになるので、僕たちは時に、彼らに彼ら自身の文化（芸者、その他いろいろ）を紹介していることにもなる。

京都である陶芸家に会った。彼はさまざまな技法で作品をつくっていて——作品がたくさん——ひとつ、さまざまな粘土の渦巻きがはりつけられた（明らかに一人遊びのような）、とても美しいのがあった。でも、ヨーコはその後で、きみのポットはとても美しいと述べていたよ。

AS〔人智学協会〕入会について。僕が入会について問い合わせたとき、エレノア・ミンネは僕のすべてのカルマの関係が加速するだろうと言っていた——そしてこのことが本当だとわかったとき、実に驚いた。そしてそれは続いていて、これからも続くだろう——だから、人はその人生について決意するよう呼びかけられるのであって（決意しようがしまいが）、そうのようになか人生は起こりようがない（そして人はそのことを意識してもいる）。僕にはこれ以上のことはアドバイスできない。

愛するひとへ

デイヴィッド

（解説）

リチャーズ宛の書簡のうち〈37〉〈38〉〈42〉は、人間の精神に関する問題についての考えが1950年代よりもさらに、明確に語りだされている。〈37〉〈38〉は、チューダーがある種の精神的危機にあったことを思わせる文面であるが、もっとも近い存在であるリチャーズだからこそ問題を語ったのであらうとも考えられる。このような精神面の問題意識の強まりとチューダーの音楽活動内容の変化とは、時間的に連続している。両者のあいだに何らかの関連性を見ることができるのか、そもそもそのような仮定が妥当であるのか、興味深い点であり、慎重な検討が必要である。

音楽活動に関しては、〈35〉〈39〉〈40〉ではハプニング風のイベントを楽しみ、また積極的にとりあげようとする態度が明らかである。ダルムシュタットのカルチャーとはまた違った方向へ

関心が動きは始めていることが読み取れる。〈41〉もその延長線上にとらえることができ、はシアターピースについてのとらえ方について、ドイツ流の概念とのギャップを指摘している。シュトックハウゼンについて語る口調も、以前より少し醒めている印象がある。1960年代後半に向かって、次なる新たなステージへ向かうことを予測させる。

注)

- 1) マース・カニングハムのダンス公演のリハーサル用録音のためのピアニストを探していたケージが、エルドマンにチューダーを紹介されたのが、最初の出会である。Cf. Holzaepfel 1994: 25.
- 2) おそらくヴォルペ1936年作曲の《Passacaglia》。チューダーはこの曲を、1948年4月20日にニューヨークで演奏している。
- 3) チューダーは後に、1950年代初頭の自分にとっては「音楽的に知覚されるものの変化」が最も重要であり、また、ケージの音楽が「一瞬一瞬の変化の連続」を要求するものであったと述べている (Tudor 1972: 24)。
- 4) 《バトル・ピース》は1944年に作曲がいったん中断されていたが、1946年にチューダーがすでに作曲されていた最初の3楽章の演奏に取り組み、それに刺激されたヴォルペが作曲を再開し、1947年に完成に至る。チューダーは「第4楽章の細かなアーティキュレーションは自分がすることになった」と述べている。Clarkson はテンポの決定に関してチューダーが貢献したのではないかと指摘している。(Clarkson 2001: 40)
- 5) ヴォルペからの1946年8月1日付のミトロプーロスへの紹介状【DTP60-7】。
- 6) 1950年12月17日、ニューヨーク、カーネギー・リサイタル・ホール。ニューヨーク・タイムズ紙（1950年12月18日）は次のように報じている。「のっけから、音楽は急速なシュルレアリスト的パターンで鍵盤中にまきちらされ、ほとんど把握することはできなかった。12音技法で作曲されているこの作品は、一貫して非リズム的、非主題的（通常の意味で）で、その響きは鋭いものであった。とはいえ、きわめて美しいエピソードもあり、多数のトピックが同時に討議されているような常ならぬ印象があった。デイヴィッド・チューダー氏はこの曲を信じ難い明晰さと美しい音でもって演奏した。」
- 7) 1933年創立。創立者の一人にバウハウスのヨーゼフ・アルバースがいる。「人々が共通の目的と責任を分かち合う共同体の確立と、芸術のもっとも高度な長所が花開くような風土を創造すること」を目標にかかげた実験的大学。
- 8) 【DTP】【MCRP】には大量のラブレターが残されているが、日付の確定できるもので最も早い時期のものは1951年11月。また、チューダーとの出会いについて、リチャーズは次のように回想している。
「私はルー・ハリソンとならんで会場のずっと後ろに立っていたのですが、デイヴィッドの演奏にまるでびれたようになりました。「あれはいったい誰？」とルーを訪ねました。そのあとに、あるいはひょっとしたら別の機会だったかもしれませんが、デイヴィッドはジョン・ケージの《易の音楽》を弾きました。私は演奏のあと彼に近づいて、いかにその音楽が私を大きく感動させたか、伝えました。私達が握手したとき、驚いたのですが、彼の手をなんと呼んだらいいのでしょうか！ とても生気に満ちていて、とても訓練されていて、しかししなやかでした。私は詩をひとつつぶやきました。それは、私の本 Centering の冒頭に掲載されています。

"HANDS

BIRDS"

デイヴィッドと私は共にニューヨークに行き、彼の部屋と一緒に暮らしました。」(Richrads 1997: 65)

- 9) 1958年6月15日付のジグルンド・ラッシャー Sigrund Rascher からの書簡【DTP58-4】に以下の記述がある。
「きみが人智学協会に入会したと聞いてとても関心をもった。ヨーロッパにいったら、必ずドルナッハに行くだろうね。私はそこにイースターのころ4日間滞在して、そのドラマティックな演出にとっても心を動かされた。」ラッシャーはチューダーが1940年代からときおり共演しているサクソフォン奏者。
- 10) 【DTP】ではリチャーズのファイルに分類されている。リチャーズ宛ならば1952年または1953年と考えられるが、1952年2月10日にはニューヨークのチェリー・レーン劇場でのチューダーのソロ・リサイタルが開かれており、1953年には2月9日から28日までラッシャーとのツアー（アイオワ州とコロラド州）に出ているので、文面と一致しない部分がある。したがって、1951年もしくはそれ以前にリチャーズ以外に宛てられたものである可能性が高い。
- 11) ジグルンド・ラッシャーの可能性あり。1951年11月15日～20日には、ラッシャーと共演している。
- 12) チューダーとシュトックハウゼンはこの最初の出会いで意気投合したようである。以下の1954年12月5日付のシュトックハウゼンからチューダーへの書簡【DTP59-6】を参照。
「親愛なる友へ
手紙をどうもありがとう。この3ヶ月間よく仕事をして、一昨日〔ピアノ曲〕6番を終えた。まだコピーを待っているところなので、きみのところには3日以内に届くだろう。16日までにこれをきみが仕上げるのはちょっと不可能ではないだろうか。かなり長くて難曲だから。6番だけにするか、あるいはきみが望むなら、6番の一部を弾いてもいいと思う。
きみから手紙をもらって、とても嬉しかった。きみの母国語で読むのはフランス語よりも僕にとってはずっと簡単だし、僕も英語はかなり速く書ける。コンサートの様子は僕には少なすぎる、きみの仕事、きみの考え、きみの友人たち、きみの国について聞かせてほしい。
僕のスタジオでのきみのコンサートのテープがある。きみの演奏がとても好きだ。だけど、知っての通り、この曲はどうしても弾かねばならないものでもない。だからいつか、僕のわかるスコアをきみに弾いてほしいと思っている。僕の受けた印象だが、きみがすることはすべて、意図によるとは限らないと感じた（もちろん、演奏しているときのこと。精神に支配されているというよりも、もっと心理的だ）。ヨーロッパにいる僕たちは、解釈者がこのような重要な役割をもつという道から遠ざかっている。
このことについていつか話そう。
今はまず、御礼を。 敬具」
- 13) おそらく1954年10月19日のコンサート。第1部では、フェルドマン《インターセクション3》、ウルフ《プリバード・ピアノのために》、ブラウン《パースペクティヴズ》、ケージ《23分56.176秒》（2人のピアニストのための）が演奏された。
- 14) 1956年4月13日付の書簡か。ケルンで7月に《ピアノ曲1番～8番》を録音するプランについての打診。【KSD 129】
- 15) この書簡に対して、シュトックハウゼンは1956年5月20日付の返信【DTP59-6；KSD132-133】で、以下のように述べている。「シュタイネッケにぜひ言ってほしい、きみ一人にイブイング・コンサート一つをぜったいにまかせるべきだ、と。強固に主張したほうがいいよ、そうすれば彼は同意してくれるだろう、だって魅力的だからね。僕の希望としては、2、4、3、6の一部、8、5、1という並びだが、もし長過ぎるなら、1、4、6、8、5（1と5は入れ替えても?）。[……中略……] きみとヴォルペ氏との共同作業は少々ばかっている。もし彼があまりに無知なことを言ったら、君はピアノを強く打つか、古くさいグリッサンドで彼を払いのけてしまえ——（講演終了!）」なお、実際にダルムシュタットでは、チューダーは7月18日にシュトックハウゼンの《ピアノ曲》の第2サイクル5番～8番を演奏した。
- 16) 1956年5月30日、ニューヨークのカール・フィッシャー・ホールでのコンサート。

- 17) I MA（英国国際音楽協会）のディレクター。
- 18) 1956年11月23日、ケルンで《変奏曲1》を初演。
- 19) シュタイネッケの怒りについて、1957年5月26日付のシュトックハウゼンからの書簡【DTP59-6；KSD166】で知らされている。「シュタイネッケは8週間まるで墓場のように沈黙している。この間、僕が五重奏の演奏家などについての問い合わせの手紙を出しても、なぜ答えてくれないのかわかった。彼は、きみがニューヨークで僕のピアノ曲11番をすでに演奏してしまったとノーノから聞いてひどく怒ってしまっている。彼、シュタイネッケは、「初演」と発表していたから。もしこれが大きな間違いでないのなら、どうか彼に手紙を書いて、君のコンサートの前には僕は知らなかったと言ってほしい。」なお、このアメリカでの初演についてチューダーは書簡<22>でシュトックハウゼンにその計画を示唆しており、実際には1957年4月22日のカール・フィッシャー・ホールでのリサイタルで演奏している。
- 20) 1957年7月9日に予定されていたフランス、ナントでの音楽祭への出演に関して。バラケの曲を含む6月7日付の契約書（未署名）が【DTP】で確認できるので、おそらくその後に書かれたもの。なお、さらにこのあと、健康上の理由で出演自体がキャンセルされたと思われる。
- 21) ここでは、ダルムシュタットをキャンセルした原因としてメンタルな問題にしか触れていない。リチャーズに心配をかけないために身体的な症状について語っていないのか、実際にメンタル面が第一の原因だったのかどうかは、書簡のみからは不明。
- 22) シュトックハウゼンの《グルッペン》のこと。1958年3月24日にケルンで初演された。
- 23) 1957年8月1日付（消印）の葉書【KSD176】で、シュトックハウゼンは次のように述べている。「ダルムシュタットの最終日にパウル・ヤコプスが《ピアノ曲11番》を演奏した。聴衆にとってはあまり面白いものではなかった。2回目の演奏はさらにもう少し生気がなくて、約7分間、フォルテとメゾ・フォルテだった。僕たちはみんな、きみがいた去年のことを思い出していたよ、、、。」
- 24) 1959年3月3日付の書簡【SKD227】で、シュトックハウゼンは、ケルン音楽ホッホシュレーでチューダーがポストを得る可能性について、校長のハイツ・シュレーターと話したことを伝えている。
- 25) 1959年10月15日付のケージからの返信【DTP52-3】の追伸に、次のコメントがある。「誰も、キノコのように生えるほかに、音楽がうまく生まれなんてありえない、と思ったり、Nに言ったりしなかったんだね？」
- 26) Richards 1997: 65-66を参照。なお、チューダーがブレーズの第2ソナタの演奏の準備をするにあたって、アルトを研究したことについては、Holzaepfel 1994: 31-33を参照。
- 27) たとえば、[1952年～1956年頃] リチャーズからチューダーへの書簡【DTP58-5】に次のような記述がある。「それから、あなたのためにアルトの文章をタイプしようと思ったのだけれど、どうしても雑誌がみつからなかった。あちこち探しまわったけれど、だめでした。たすけて！」
- 28) 1960年6月15日、ケルンのアトリエ・マリー・パウエルマイスターでのコンサートと推測される。
- 29) 1960年7月9日のリチャーズ宛の書簡【MCRP26-1】にも、以下のような文面が見られる。「ここロンドンのセンターでオイリュトミーの公演を見た。マルゲリート・ラングリュウというとても美しいオイリュトミストがいて、皆がとても美しく朗読し、音調とリズムにとっても溢れていた。」
- 30) バンドネオンのことを指すと推測される。
- 31) シュタイナーの思想において、「エーテル」は精神界と物質界を仲介する。エーテルの力は生長力であり、これがエーテル体として人間に宿る。エーテル体には前世の叡智が浸みこんでおり、このエーテル体の潜在力により、修行者は、いつか生じるべきことの予言的イメージや、果たされていないカルマを「見る」ことができる。また、精神界と物質界のあいだの「境域」では、修行者は自分の未解決のカルマ、自我の短所に出会う。
- 32) 実際には1961年5月5日にブレーメンでシュトックハウゼンの《ピアノ曲9番》が初演され、ダルムシュタットでは11番が演奏された。

参考文献

書簡

- 【DTP】 (= *David Tudor Papers*. The Getty Research Institute, Research Library, Special Collections.): Box 15, 51, 52, 58, 59, 60, 61.
- 【MCRP】 (= *Mary Caroline Richards Papers*. The Getty Research Institute, Research Library, Special Collections.): Box 26.
- 【JCC】 (= *John Cage Collection*. Northwestern University Library.): Series 2.
- 【HPC】 (= *Henri Pousseur Collection*. Paul Sacher Stiftung.): Correspondences.
- 【SWC】 (= *Stefan Wolpe Collection*. Paul Sacher Stiftung.): MF268.1.
- 【KSD】 (= Misch, Imke & Markus Bandur (eds., 2001). *Karlheinz Stockhausen bei den Internationalen Ferienkursen für Neue Musik in Darmstadt 1951-1996: Dokumente und Briefe*. Kurten: Stockhausen-Stiftung für Musik, 2001.)

二次資料

- Clarkson, Austin (2001). "From Tendenzmusik to abstract expressionism: Stefan Wolpe's Battle piece for piano." *Mitteilungen der Paul Sacher Stiftung*, 14 (Apr): 38-43.
- Holzaepfel, John (1994). *David Tudor and the Performance of American Experimental Music, 1950-1959*. Ph.D. Thesis, City University of New York.
- Richards, M. C. (1997). "Ekstatischcs Erlebnis: Erinnerungen an David Tudor". *MusikTexte*, 69/70: 65-66.
- Tudor, David (1972). "From Piano to Electronics." *Music and Musicians*, 20 (12): 24-26.

(本稿は平成20～23年度科学研究費補助金 (基盤研究 (C)) による調査研究に基づく)